俳　句　雑　誌

水　明

２０２２　７月号

令和四年七月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十五巻第七号

《今月のかな女》

玉の肌を焼く怖ろしや土用灸

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

土用は四季それぞれにあるが、普通は、立秋の前十八日間の夏の土用をいう。梅雨が明けて本格的な夏の到来で、体力の低下を感じる時季である。土用鰻と同様に、土用灸も夏の健康増進の一つとして伝わってきた。玉の肌というからには、灸を据えるのはうら若き女性のように思えてくるが、かな女ではないとすれば誰なのか。いろいろと思い描ける俳句である。「肌」は「はだえ」と読みたい。

（鬼之介・註）

水　明

第1102号

―華の一句―

芍薬や添へ木のいらぬ立ち姿

田中章嘉

「立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花」と、美人を形容する慣用句の出出しの言葉を句にしているのだが、「添へ木いらぬ」がご愛敬である。その昔、「縹緻（きりょう）と気風（きっぷ）の良さで名を馳せた名妓を彷彿させる芍薬で、杖を持たずに百合の花のように歩む老妓のように、古木ながら確りと立っている芍薬である。（鬼之介・推薦）

水明

令和４年
７月号

今月のかな女　1
華の一句　山本鬼之介　4
夕景（作品）　鈴木康世　6
初夏の頃（近詠）　石山かつ子　7
草茂る（近詠）　境延昭　8
冠木門　※主宰作品の鑑賞　井口俊晴　10
硯箱　※季音月評
季音「雪」（同人作品）　大村節代　小倉倭子　栢尾さく子　ほか　12
季音「月」（同人作品）　鳥羽和風　梅澤佐江　高島寛治　ほか　19
季音「花」（同人作品）　青木鶴城　日高道を　大塚茂子　ほか　24
『水明誌』を繙く　高岡修　29
現代俳句鑑賞　網野月を　30

☆水明賞受賞者ノオト

○自選二十句　原田秀子 32
上州のキラ星　星野和葉
○自選二十句　曲淵徹雄
黒部の太陽　五明昇
○自選二十句　保坂翔太
翔太句にしてしまう作法　網野月を

水明集　渋谷きいち　村杉清吉　梅澤輝翠　ほか 44

水明集作品評　山本鬼之介 56
水琴窟（水明集五月号鑑賞）　池田雅夫 60
山紫集 62
鼓笛集（同人作品）・私の一句 68
俳誌望見 72
句集喝采　梅澤佐江 73
水明例会報・各地句会報　近藤徹平 74・77
夏季競詠・兼題 82
第十七水明抄・作品募集 83
夏行のご案内 84
風声・発展基金御礼 85
後記

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

夕景

山本鬼之介

夏帯や紅さす指の板につき

しつとりと格子戸濡らすさつき雨

鈴蘭に玩具のじようろ働けり

遠雷や反り美しき巫女の舞

法外なこと言ふ女梅雨の月

佛燈に火蛾水争ひのありし村

遠州といへば「石松」沖膾

重畳や地場の鰻と里景色

初夏の頃

鈴木康世

先達は二羽の夏蝶阜みち

城址とて阜の起伏風薫る

葉桜や生きてしあらば出合ひあり

禾のとび眼鏡くもらす麦の秋

竿売りの声を背に聞く薄暑かな

扁平の足の重たき青葉冷え

髪洗ひ意気立てなほす夕べかな

家の前が通学路で朝百人以上の子供達が通る。通常の生活が出来る様になり色とりどりのランドセル・マスクの元気な声が弾んでる。挨拶する子、はにかむ子などいろいろだ。朝の至福の一刻を感謝しながら見送る。庭に零れ種の黄花コスモスが一本早くも咲き始めた。一重の筈が八重咲きで色も濃い異変した様だ。これも楽しみ、戦火で不安な毎日を過ごしている人達に一日も早く平和が訪れます様にと願いながら坂の上に富士を見に行く。

草茂る

石山　かつ子

大利根を俯瞰してゐる練雲雀

夏の鳶影を大きく悪魔めく

夏草や犬に案内されてをり

刈草のどこかに罠がかくされし

対岸のよしきり声を競ひけり

夏河原統べて一樹の杜鵑

郭公や川辺は風の湧くところ

我が家の紫陽花は、嫁いで来た時にはこの位置に咲いていた。もう六十余年前より咲いていたことになる。昔はここにポンプ井戸がありその先に菖蒲や真菰が生えていた。

この一帯は湿地帯であるにも拘わらず川に囲まれた中州で地盤が悪いので地下五十メートル以上掘らないと飲み水が出ないので共同井戸であった。

今年も又、心を和ませてくれるこの紫陽花の色の変化が好きで楽しみに手入れをしている。

冠木門

◎主宰作品の鑑賞

境　延昭

四月号

流れゆく雛のためらふ一ノ堰

季語「雛流し」は歳時記に「雛祭」と「雛納め」の間に並んでおり、雛飾りに附随したものと思っていた。解説によれば穢れを払い形代の人形を流した風習を伝える行事とある。中七の擬人的な表現に納得する。作者が敬愛する実兄、紫黄師が飛鳥山吟行で詠まれた〝堰切らば蛇身とならむ花筏〟が頭を過る。

啓蟄や漏水箇所を探る耳

水道は電気、ガスにも増して生活には必須のインフラである。ローマには二千年前の水道の遺構が遺り一部は今も使用されている。観光名所のトレヴィの泉は古代ローマの庶民の水飲み場だったとか。日本でも神田用水など江戸の町民の重要な生活基盤であった。近年、水道管も徐々に耐震性のものに代っているようだが、何かの折に道路が陥没し凄い勢いで水が噴き出す情景をニュースで見た事がある。漏水など水道管の保守には聴診器の様に、耳に頼るのだろう。虫が地中から這出る二十四節季「啓蟄」の季語との取合せは意表を突く。

風船の蛸のはつちやん連れ歩く

諧謔味などと云うよりストレートに愉快。罪がなく底抜けに明るく、誰にも覚えのありそうな景が良い。お祭りか或いは近くのスーパーの開店イベントでもあろうか。それにしても現役であれば職場の部下には決して見られたくない場面である。

出世頭をかこむ宴よ初桜

当月のタイトル「花の宴」はこの句による。「出世」は元は仏教上の言葉であったが世に出て立派な地位・身分となることとして使われるようになった。長年サラリーマンで、常に競争を強いられた身には辛辣な思いが胸を突く。同期入社で独身寮も同じだった飲み仲間が、管理職登用で差が付き異動の度に距離が出来ていく。お役人ほどではないが、子会社や関連会社への出向・転籍で所謂側線入りもあって本社部長には一握りが残るのみである。役員ともなれば改選の時期次第もはや運に頼るよりない。

この句の「出世頭」、社内ましてやその同期生の内とは思えない。兄弟や親族、同郷せいぜい同窓の中のことであろう。そうだとしても初桜には冷やかな風も吹いた筈である。

五月号

番台は昭和の華よ春灯

番台と言えば銭湯、入口のすぐ横に男湯と女湯の脱衣場を見下す高台に年の入った女性が座っていた。料金を払い、時に剃刀を買ったりした。銭湯自体珍しくなったが今ではホテル風のフロントで受付、ロッカーの鍵をもらい男女夫々の更衣室に入る仕組みの様である。中七の措辞、座る人への羨望を含め銭湯の番台を懐かしむ気分は分かる。とは言え実際に座る度胸があったかは疑問である。

艦長の袖の金筋風光る

豪華客船の艦長であろう。太い四本の金筋が誇らしげである。四本の金筋は海軍大佐に由来すると云う。今は旅客機の機長がそれに倣っている。旅客機のコックピットには機長、副機長と機関士と三人の制服が居た。機関士を見なくなったのは平成になってから。装備と機材の進化に合わせた合理化と思う。しかし長い航海の大型客船ともなれば今もクルーは相当の数に違いない。航海の安全と旅の快適その責任の全てを背負う立場、季語「風光る」には出航の緊張感を読み取る。

花冷やオート・クチュール試着室

オート・クチュールは高級衣装店、本来的にはパリの協会加盟店を指す。そしてそこで作られた高級仕立服を言う。協会加盟にはデザイナーは勿論、お針子など常駐スタッフや専属マネキンの数まで届け出るとか。特定の上流階級目当ての世界である。近年高級既製服であるプレタポルテへの流れに押され気味と聞く。依頼人のためだけの創作、デザインの段階のモデルから何回となく仮縫いが続くのであろう。デパートのカーテン一枚で仕切った試着室とは訳が違う。相応の優雅な空間を想像する。

花冷えの季語に浮世離れしたオートクチュールの世界に対する作者の冷めた目がある。

彼の日のやうに心ときめく春の川

タイトル「ときめきの川」はこの句に因る。「ときめき」は広辞苑に喜びや期待で胸がどきどきすることとある。彼の日の作者に何が？春の川辺の出会いか告白かそれとも……と、タイトル句であるだけ殊更読み手の詮索を誘う。勝手に想像すればよいのだが具象を信条とする作者としてはシャイに過ぎる。

春の雲動かぬままに夜の空

はっきりした形でなく刷いたような薄雲が春の雲の特徴である。春の雲の季語を使って春の月を詠む。句に「月」の文字は無いが夜の空には確実に月が存在する。満月とは行かぬが春の薄雲がそれと分かる上弦の月を想像する。

硯箱

◆季音五月　　井口俊晴

春風に眉間の力抜けてをり　　鈴木康世

寒いと眉間に皺が寄って、いけないなと思いながらも、つい険しい顔になっていた。でも、ここ二、三日は日差しが暖かく、冬将軍が北に帰って行った気がする。玄関に出てみると、春風がそよそよ顔を撫でて、昨日までの眉間の力がふっと抜けているのに気付かされた。陽気に誘われ、ちょっとお出かけだろうか、お洒落なワンピースを着た近所の奥さんに会釈された。

犬同士飼主同士のどけしや　　星野和葉

幼稚園の「ママ友」という言葉はかなり一般的になったが、それでは「イヌ友」はどうだろう。暖かくなると、犬の散歩で顔見知りの奥さん同士、イヌ友の気安さ、ちょっとした情報交換も兼ね、立ち話をする余裕が出てくる。時に笑い声も聞こえる。犬の方も慣れたもので、お互いにちょっかいを出したり、出されたり、道にゴロンと寝転がって足をバタバタさせたりしている。犬も飼主も、お互いの交流を深め合って、のどかな時間が流れていく。

草餅や小江戸老舗の包み紙　　石井喜恵

のどかな春の一日、小江戸・川越では二月二十八日を「草餅の日」とし、この日に草餅を食べれば「一年を健康に過ごせる」と言い伝えてきた。だから、街のお菓子屋さんはこぞって草餅を店頭に並べる。中でも、創業が慶応元年（一八六五年）という老舗の菓子店は人気で、わざわざ遠くからやって来る客も珍しくない。多い日だと一万個も売れるとか。一個百二十円として…、つい計算してしまう。まあ無粋な想像はここまでにして、老舗の包み紙にくるんだ名物の草餅をお土産に帰りますか。

猫捜すビラ宙に舞ふ春一番　　高島寛治

春一番が吹き荒れ、駐輪場の自転車は軒並み倒れてしまった。スーパーのビニール袋など、ひとたまりもなく、風にあおられ空に舞い上がっている。折しも飛んで来たビラの中に、迷子の猫を探すビラが混じっていた。貼ってあった電柱からはがれて飛んだものだろう。「キジトラ、オス・三歳、人懐っこい性格です」などと書いてある。これだけの荒れた天気、猫はさぞ心細いことだろう。早く見つかって家に帰れるといいのだが。

人住むを大地と言へり春の泥　　荒井倶子

春になった。見上げる空は晴れ渡り、雲雀の声が聞こえる。農家は冬の間に硬くなった田圃を耕し、作付の準備に精を出す。眠っていた五体が目を覚まして動き出す。生きている喜びが胸の底まで染み渡る。しかし、気温はまだ低く、夜の間にできた霜柱は、朝になると足元で解け、そのまま乾かずに春の泥となる。それでも、ここは間違いなく私たちが住み慣れた、かけがえのない大地なのだ。

紅梅や牛の像にも二礼して　　松宮保人

天神様にお参りをしたら、境内にそれは見事な紅梅が咲き誇っていた。私みたいな者でも、厳かで有難く、どんな願いでも叶うような気がしてくるから不思議だ。いつもより御賽銭をはずんで、二礼二拍手一礼して下がる。ちょっと離れた場所には牛の像が寝そべっている。こんもりとした、天神様お馴染みの牛の像だ。思わず牛にまで二礼してしまった。梅の花が笑っている。

密談めく男二人の春炬燵　　石田慶子

通りがかりにちょっと部屋を覗いたら、いい歳をした男が二人、もう暖かいというのに、炬燵に入って何やら話し込んでいる。差し迫った大事な話だという感じではなく、雰囲気からすると、どうも良からぬ相談でもしているようである。女性問題かな、それとも飲みに出かける相談かな、まあ、さして込み入った話でもなさそうだが…。そんな想像をかき立てる春炬燵の二人です。

ふらここや寂しき時は軋みたる　　石川理恵

いいお天気なのに、なぜかユーウツ。朝ごはんを食べる気がしなかったので、コーヒーを一杯飲んだだけで、近くの公園にやって来た。赤い鉄柱に吊られたブランコが二台あるが、まだ早いせいか誰も乗っていない。そっと腰かけて漕いでみたら、鎖が軋むような、寂しげな音を立てた。春の憂いに沈む私の心がブランコにも伝わったのだろうか。

季音雪

エトランゼ

大村節代

敷藁に包まれ野宿柿若葉
ころもがへ野暮な男に先越さる
夏めきぬ人影動く花頭窓
花アカシア風の抜け行く路線バス
卯月浪襟足美しきエトランゼ

愛の文字

小倉倭子

寄せ書きの「愛」の文字浮く目借時
天国で明世師せつせと袋掛
鳴かずんば一緒に泣かんバードディ
生命線を突かれ餌を愛鳥日
百科辞典の如く『マネキン』聖五月

梅は実に　栢尾さく子

人生は黒板アート明早し
ボサノバを跨ぐ姿で夏の蝶
輪唱を乱して過ぎぬばらの虫
滴りにふと止む気力残りをり
熱き手のあの日の記憶梅は実に

若葉　菊池ひろこ

再起する時か若葉の雨上り
楽譜類積み上げてある若葉の窓
袋掛姉さん被りすたれたり
袋掛人おもふとき山を見る
青鬼は主役になれずこどもの日

風薫る　五明昇

薫風を渉りて戻るブーメラン
薫風に仁王が癒す力瘤
草笛や風の集まる天守台
若楓作務余年なき青年僧
母の日の妻を労るレストラン

天こ盛り　境延昭

夏来る子らの飯碗天こ盛り
草笛の一小節が呼んでいる
愛鳥日鳴くを忘れし鳩時計
鷗外の旧居の街の錦鯉
青嵐宮に寄進の薦被り

訛まみれ　椎野美代子

坊百畳青い風呼ぶ今日立夏
大将の位ぞ神饌の桜鯛
朝市の訛まみれの鮑買ふ
風薫るキャラメル色の脚線美
象に会ふそれより夏野匂ふ匂ふ

牡丹　島津初花

永き日の路肩へ預くる三輪車
花種や雨の予報を聞きて蒔く
大いなる音を残して牡丹散る
牡丹の回り咲く頃祖父の逝く
散り際の影像と見し大牡丹

風薫る　鈴木康世

薫風や寺の格言新しく
風薫る心を満たす水を汲む
久に訪ふ夫睡る墓風薫る
風薫る四阿に坐し瞑想す
薫風や此の世の旅をまだ続け

麻暖簾　田寺玲子

一力の風あたらしき麻暖簾
薫風や港都駆けゆく人力車
白壁の続く津の国燕の子
出航のテープ飛び交ふ初夏の夕
麦秋や山裾走る一輌車

麦笛　十倉和子

麦笛の雅楽に笑まふ道祖神
馬頭観音の太き道標麦の秋
石棺の鎌研ぎあとや麦の秋
麦秋の十二神将声からぶ
焦げ飯をよろこぶ助つ人麦の秋

草に眠りて　永野史代

若楓隣家に赤子生まれたり
この川に入水の作家若楓
二段跳びいや三段跳びの飛魚よ
草に落ち草に眠りて風船は
花の精となるまで纏ふ花吹雪

五月　西山貴美子

深夜便のノイズざらざら五月闇
幼な子と言へど正客こどもの日
五月嵐（メイストーム）正座はいつもまぶしくて
夏落葉はらり民話の人となる
鬼平の声のそぞろに五月闇

若葉風　波多野寿子

夏川の碧き水音曾孫誕生
讃美歌は心の灯し聖五月
チアダンス少女眩しき若葉風
客人の楚々とと入り来る鉄線花
ピザ焼けて明かるき窓辺夏はじめ

無為　星野和葉

木々の葉のそよぎ卯月のみ空かな
新進の指揮者卯月のシンフォニー
逆上がりして蹴り上ぐる夏の雲
夏雲や白波寄する烏帽子岩
夏雲や無言で無為の牧の牛

逃げる　茂木和子

麦秋やスキップの子の見え隠れ
麦秋の交番只今巡回中
麦秋やローカル線の通過駅
毛虫今生死の身際逃げよ逃げよ
逃げ足の捌き見惚るる毛虫かな

江の島　矢作水尾

全開の孔雀と歩む愛鳥日
山吹や絵島屋敷に昨夜の雨
鯖の背や藍より青く輝きぬ
海風や勢あらたに夏つばめ
江の島の裾を洗ひて卯波寄す

五月晴　山中みどり

お迎への来る迄遊ぼ罌粟の花
ひなげしや鉄の匂ひのモニュメント
両国や五月の風に寄せ太鼓
子煩悩な力士金星五月場所
五月晴お櫃の箍を磨き上ぐ

硝子玉　柚木治子

筍の産衣ぬがせるさまで剥く
捩花の芝生の風やダイエット
竜宮と思ひ近づく夜店の灯
宝石に化くる夜店の硝子玉
浄めらる百名山の岩清水

初夏の風　由良ゆら女

目の中で育ちましたとカーネーション
薫風の車座に置くバスケット
小満やかゆいところに手が届き
ダチュラ咲き病に支店出張所
襟足に坪庭の風新茶汲む

海ふるさと　吉住光弥

錦鯉とて世を睥睨のちからあり
家戸全開吸ひて立夏と云ふ空気
法螺貝吹き山伏修行夏来る
鮑海女帯縄解きて恋も生れ
鮑跳ぶ海ふるさとに帰り来よ

平成以前　網野月を

夏めくや鬼蔦刻む偽御影
麻の香や績めば織り成す麻の葉文
旧友との交誼は今も初鰹
ひなげしに犬もありけり狭庭にも
夏浅し星の王子の犬となる

カフェテラス

石井喜恵

五月美し水辺明るきカフェテラス
蜜豆やさらりと好きと言へる仲
けふ立夏グリーンサラダの透ける皿
身が透けるほどの陽光若楓
薔薇の香に酔うて気の済むところまで

寄せ太鼓

石山かつ子

まつすぐに行けば切り岸棚霞
対岸より笛吹川の徒鵜飼
母の日や江戸出し物の寄せ太鼓
昼酒は腹にやさしく愛鳥日
寄せ布の亡者踊りや戯唄も

ハンモック

大橋廸代

鐘打つやとんび寄りくる青岬
潮の香の大樹に抱かるハンモック
ハンモック夜は星屑と栗鼠親子
独乙むすめら肩をあらはに麦の秋
蟲入りの琥珀を選び麦の秋

☆

☆

季音月

孫と父母　鳥羽和風

長男と言ふ貫禄や武者人形
眉太き皆決す武者人形
母の日や我が子忘れし母を訪ふ
父の日のステーキ父は箸で食ぶ
父の日や息子に変はる世帯主

蕗の雨　梅澤佐江

両岸の若葉明りに照る水面
袋掛遠くに光る千曲川
ナプキンの薔薇母の日の予約席
罫線を越ゆる追白みどりの夜
言葉とぎれし二人に香る蕗の雨

夏来る　高島寛治

夏来る利根大堰は満満と
忌を修す立夏の水を惜しみなく
新緑に濡れて谺の還りけり
貴婦人の如き灯台卯月波
旧道の気配は明治街薄暑

薫風　大場順子

薫風に和する棹歌最上峡
薫風や筆勢をどる命名書
薫風にふくらみ届く祝の文
野の花を壺に投入れ立夏かな
筍を剥けば輝く黄金仏

蛇の目傘　森川義子

菩提寺のぼうたん守る蛇の目傘
緋を尽しぼうたん映ゆる古都の寺
母の日や天地無用の荷が届く
ひねもすを窓辺陣どり愛鳥日
立ち話に猫の擦り寄る夕薄暑

初鰹　藤澤喜久

モンブランのインクのブルー風薫る
歳時記を捲る薫風修司の忌
ペリー記念碑潮の香交る風薫る
初鰹江戸つ子気質も疎らなる
初鰹土佐の叩きの男振り

五月に　松井由紀子

聖五月母の鋏に小さき鈴
窓枠に朝陽いつぱい立夏かな
明るめばもの買ひに出む走り梅雨
無口なる子のなほ無口梅雨湿
夜鴉のぐづり鳴き聞く五月闇

聖五月　井上燈女

初夏や友の小さき人形展
聖五月吾の分身の句碑磨く
父祖の地のまだまだ残る麦の秋
托卵の修羅の声張る行々子
病葉や御朱印帳の半開き

江戸むらさき　松本光子

隅田川綺羅を舞ふなり百合鷗
むしろ持ち赤飯さげてつつじ山
西日差す薬品倉庫に薔薇真つ赤
色襟の江戸むらさきも夏はじめ
つややかな色惜しげなくさくらんぼ

回向柱　丸山マスミ

ペディキュアの足颯爽と夏来る
花橘姫街道の別れ路に
新緑や回向柱に舞ふ散華
もてなしは木洩れ日を来る初夏の風
沖ノ島姫宮恋うて飛魚のとぶ

葉柳　山田美佐尾

初夏や人生変へた逆上がり
小犬を連れて雨をしのぐや秋田蕗
葉柳や半纏粋に女車夫
母の日や母に歌舞伎の名台詞
橋いくつ渡り薄暑の隅田川

聖五月　渡辺舎人

天を衝く第二体操聖五月
木暮枝や仕ふるやうに番鳩
開襟の海原の胸熨し展ぐ
又の世に人を待たせて豆の飯
葭切の舌打にあひ歩き去る

良薬　池田雅夫

明易の段段畑鍬の音
良薬にゆがむ口元梅雨籠
啼くことに一所懸命青蛙
堂堂と蟻の行軍なる山路
表札に立ちはだかりし葵かな

夏帽子　霜中冬至

棟梁には邪魔になりそな夏帽子
麦藁帽の似合ふ人あり屋根にあり
百姓を仕舞ふ友あり夏帽子
百姓とはのどかな響き青田波
まへもうしろも小さな青田鳥羽の渓

村の長老　町野広子

もぢもぢと風船貰ひ損なふ子
菜種梅雨貰つてもらふ夫の物
飛魚のここぞと舟の横を飛ぶ
つばめ魚島から島へ遊覧船
神事に集ふ村の長老若楓

志功の天女　森本早苗

風薫る志功の天女舞ふロビー
讃岐路や喉い辛き麦の秋
龍馬参りし「楠子之墓」や楠若葉
老鶯や亀一族は西を向く
白々と夜明けの庭の山法師

麦の秋　井口俊晴

吹き渡る風となりたし麦の秋
故郷や頭を垂るる麦畑
草笛の鳴る子鳴らぬ子帰る道
険しくとも蝶となる夢毛虫かな
雨の朝沙羅が咲けりと妻の声

余花　松宮保人

園庭へ散りたる子等や木の芽時
墓に来て胸の動悸や八重桜
行く春や尽きぬ四辻の立ち話
奥山の奥に見付けし余花一樹
母の日や母に叛きし日を偲ぶ

明け易し　松山清子

明け易し夢の続きの人想ふ
半寿まだ余生にあらず新茶汲む
薫風やかすかに揺れし象の耳
赤き花溢るる花舗や聖五月
飛び魚の海の色して売られゐる

軒菖蒲　上戸千津子

名刹や九尺藤の別天地
新緑にいつもの山が異郷めく
不揃ひや子等の手伝ひ軒菖蒲
青葉山眼下に海の果てしなく
麦秋や雲は魚や鳥になり

郷愁　荒井倶子

ブティックの服に赤札春闌ける
胸に入る風やはらかし遠蛙
草笛を聞きて郷愁ふつふつと
母の日や母の齢にまた一歩
薫風や単純泉にとつぷりと

飛魚　内田恵子

飛魚や海より生命誕生す
飛魚やスーパーマンになるつもり
鮮やかな職人パンツ毛虫焼く
野太くなる少年の声夏兆す
麦の秋フレンチトーストとハーブティ

麦の秋　西浦千枝子

豆飯炊いて在りし日の夫染みじみと
走行車の窓開け放つ花みかん
昭和一桁友の減り行く麦の秋
黒南風や風車の回り鈍くなる
おとなりの茉莉花匂ふ集会所

菖蒲湯　井関礼子

菖蒲湯やつつがなき日々こよなくて
菖蒲湯や子育てせしも遥かなり
母の日の花鉢届く果報かな
麦秋や空明るきに籠り居て
麦秋や一雨の欲し風そよぐ

雨蛙　野口和子

夫休む畔に跡あり青葉風
雨蛙鳴きて車の展示場
顎までも湯船に浸かり走り梅雨
鱒放流釣人並ぶ夏の川
夏の星空つぽのバス過疎の町

砥石　川崎道子

桐の花天守が見ゆる自刃跡
口笛がメロディーになり花は葉に
麦の秋襟元のタグむずがゆし
麦の秋ホットケーキを焦がしすぎ
錆鎌砥ぐ砥石のくぼみ麦の秋

今朝の幸　井上玲子

夏立つや樹海の息吹胸深く
ハミングを青葉若葉の樹海ゆく
今朝の幸夏鶯を窓に聴く
母の日や平ひらかに生き卒寿なり
植田はや風の青さに波打てり

出会ひと別れ　正木萬蝶

出会ひは赤別れは青きソーダ水
風かをる母校はいまも丘の上
風薫る理論武装を解くリケジョ
汝が胸のクルスの踊る聖五月
袋掛エデンの咎を覆ふかに

母の日　福田千春

幾年や母の日に挿す白き花
母の日の母の大事な置き薬
色あせぬ母の日の肩たたき券
袋掛慣れぬ手つきの新家族
自由とは手より離るるゴム風船

季音花

解　青木鶴城

行く春や解なき恋の方程式
連山の色太りゆく夏はじめ
美しき嘘に乾杯虞美人草
禁断の木の実手にする鑑真忌
巣立鳥峠越ゆれば新世界

夏の夕　日高道を

高欄に巫女の衣擦れ夏初月
角打ちに鰡背なをとこ夕薄暑
夕凪や島のをんなは舟を待つ
青海波の白に際立つ夏料理
江戸つ子にやあちよいと贅沢初鰹

南風　大塚茂子

雨上がり地蔵の耳に天道虫
夏初め堀割響く利休下駄
今日の無事祷りて父に新茶汲み
正南風の風を把へて一輪車
江戸小紋さらす川辺や南吹く

ヒロイン　近藤徹平

ヒロインの妖しき目線錦鯉
唐丸の往きし街道麦青し
寄せ太鼓ひびく両国五月場所
レガッタや両岸競ふ応援歌
パラソルやスピッツ乗するベビーカー

夜会服　野田静香

夜勤明け看護師仰ぐ青葉山
夜会服月下美人の咲く館
朝ぼらけ桶職人の夏はじめ
夏服の流れ軽やか交差点
夕凪や遅れ遅れの電車来る

聖五月

石川理恵

食パンのよく膨らみぬ五月晴
亡き父も勘定に入れ柏餅
此の家のルーツは土佐よ初鰹
ほろほろと穂紫蘇を散らし初がつを
新しき墓標のあまた聖五月

若葉風

熊倉千重子

青き館のバレエ教室覗く蝶
一本釣りの甲板叩く初がつを
若葉風入れ欧風のレストラン
両の手に掬ふ青さよ草清水
文字摺草捩れねぢれて自己主張

母の午後

石田慶子

袋掛実習生の来ない村
袋掛稚すやすやと籠の中
つつじ愛であんパン愛づる母の午後
母の日の貸切り風呂の声の艶
折紙の兜は黄色こどもの日

善き日哉

河野はるみ

若草を踏みて幼子つんのめり
間の手に波音入り袋掛
先づ酒を定めて蕗のバター焼
今宵こそ赤のワインを母の日や
贈る喜び受くるしあはせ母の日や

夏めきて

田中章嘉

母の日や母の形見の黒き数珠
水飯を掻つ込む朝の忙しなさ
夏めきて午後の静けさ睡気さし
芍薬や添へ木のいらぬ立ち姿
卯の花を腐す雨雲居坐りて

更衣

野平美紗子

更衣母の遺品を弄りて
夏めくや真白きシーツ靡く庭
向う岸に動くものあり初夏の沼
料亭の薄味真似て夏料理
今年こそと張切る手入れ薔薇の庭

夏来る　下川光子

少年の掛け声風に夏来る
踏みつける立夏の象の土匂ふ
象園の浅き眠りや薄暑光
葉桜や制服馴染む女学生
著莪の花水琴窟に耳を寄す

四十雀　宮﨑チアキ

新緑や「ポッポ電車」の野辺を行く
吊橋に酔ふ足元や鯉幟
蜜豆や女同士が華やいで
鳥声のか細くなりぬ若葉雨
名も知らで聴き惚れし日日四十雀

初夏の街　後藤綾子

マイナンバー付けて闊歩の初夏の街
土用波浜に打ち寄すうつせ貝
百頭の羊の牧場鯉幟
五月晴交響楽の音あはせ
踊り子の身ぶりしなやか今年竹

柏餅　中野彊

草むしる無念無想の日曜日
柏餅ひいきチームは負けばかり
つつじ燃ゆ今日すべきこと肩にかけ
青梅を拾ひやさしく手にのせよ
体温計泣く音かすか走り梅雨

牡丹　飛永鼓

ぎしぎしと現はるる風格牡丹かな
ぼうたんや天気予報の気になりぬ
陣取りて三日天下の牡丹かな
今日一片明日は何片牡丹散る
全盛を極めしあとの牡丹かな

聖少女　瀬戸雄二郎

ポピー畑自撮りばかりや聖少女
芥子の花小言聞くときや頭を下げよ
ひなげしのひなげし押し退け群れ咲けり
青春に傷無きは無し桜貝
葱生姜大蒜も副へ初鰹

青葉風　葛城千世子

水面には水玉模様青葉風
タッチする同じ高さや子供の日
郵便の待ち遠しくて青葉風
母の日の母の眼力玻璃戸越し
演劇の役はくじ引き若葉風

梅雨晴間　宮崎紫水

登校は黄傘の列に梅雨に入る
下駄箱にゴム長ずらり梅雨に入る
腕相撲しばし中断梅雨晴間
宿題はひさびさになし梅雨晴間
校庭に笑顔ぽつぽつ梅雨晴間

序破急　原田秀子

噴水の洗礼うけしベンチかな
噴水の序破急風が指揮をとり
背割れて急発進のてんと虫
鼠尾馬尾鼠尾いろ鮮かな新茶汲む
「棗」てふ茶房の新茶ああ甘露

臼と杵　曲淵徹雄

返照の朱がからみつく初緑
俳聖の句碑の見守る磯遊び
蜘蛛の巣や納屋に納まる臼と杵
遠雷や火種の絶えぬ楽屋裏
電球にてかる夜店の天狗面

かづら橋　保坂翔太

一村を見渡す峠花辛夷
玉響の夢の続きを彼岸かな
集落と集落つなぐ遠蛙
待ち人が時を食みゐる花曇
囀や半歩踏み出すかづら橋

新樹晴　笹本啓子

夏きざす切子グラスの光かな
少女らの腕眩しき更衣
行き交はす空のリフトや新樹晴
ふる里へ続く単線若葉風
卓袱台を囲むはらから桜ん坊

薔　薇　　橋本京子

バレリーナめざす幼児ら薔薇の門
話し込むシスター二人薔薇の前
薔薇園に紙のキリンの長い首
イギリスの紅茶商ふ薔薇の庭
薔薇開く海見る像の赤い靴

白菖蒲　　檜鼻ことは

十八里歩けば都柿若葉
薔薇の香や洋館並ぶ坂の道
家族みな揃うてゐた日半夏生
帷子ノ辻と言ふ駅沙羅の花
茶屋町の名残の格子白菖蒲

合掌の中　　松島寛久

過去消して一歩踏み出す木の芽時
蛍火や祖父母と父母も文科系
恋は夜逃避行の蛍の火
空裂けてキーウの嗚咽春の行く
合掌の中にほのかな蛍の火

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2022年8月号

特集 俳人たちの歩いた町
○俳人たちの歩いた町
高濱虚子…今井肖子
佐藤鬼房…渡辺誠一郎
成田千空…横澤放川
石田波郷…西村麒麟
長谷川かな女…山本鬼之介
伊藤白潮…加藤峰子
鈴木六林男…久保純夫
穴井太…福本弘明
○わが町～エッセイと俳句
小野寿子
中川雅雪
古田紀一
河内静魚
如月真菜
名村柚香

特別作品21句 岡村千恵子

〈グラビア〉俳句界NOW 岸本尚毅

特集 伝えたい、師のことば
高﨑公久　伊藤伊那男　守屋明俊
森野稔　草深昌子　千々和恵美子
小川晴子　藤本美和子

※セレクション結社「にに」岩淵喜代子

私の一冊 加古宗也「若竹」

対談 佐高信の甘口でコンニチハ！
伍代夏子（演歌歌手）

「俳句界」投稿欄
一流選者14名！
日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

『水明誌』を繙く（水明五月号）

高岡　修（「形象」主幹、現代俳句協会理事・同評論賞選考委員）

梅が香にしんと海馬の静まれり　横山礼子

いつの頃だったかすっかり忘れてしまったが、海馬という言葉に出会ったときの衝撃は、いまだに薄れていない。しかもそれが、言葉や記憶に関わる脳の器官の名称であるという事実は、若かった私をさらに驚愕させた。私は思う。海の馬――その言語自体がすでに極上の詩の世界であるのだと。むろん、掲載作品の主たる意味は脳の器官としての海馬であるだろう。しかし、同時に私は、この作品世界に一頭の海の馬を見てしまう。ぐっしょりとたてがみを濡らした海色の一頭の馬を。そのイメージは「静」の一字から激しく喚起されているのかもしれない。「鎮まれり」ではあまりにも精神的なものになってしまい、動静的な感覚が生まれないからである。さらに言えば、一句に像的な喩を創出するのが季語なのだが、この句の季語は「梅が香」であり、結果として海馬が像的なものとして結晶することになる。「与えられたAが、それから最も遠い関係にあるBの中で一致共存すること」を詩としたのは西脇順三郎だったが、まさに、この句の「梅が香」と「海馬」がその最も遠い関係にあるのだといえる。

盲目の杖に雪解け水の音　檜鼻ことは

上記「梅が香」の作品で私はあえて「誤読」をした。つまり「海馬」を「海の馬」と読んだ。そうして私は、この作品でも誤読をしようと思う。ただ、あえて誤読とはするが、通常、人がそう読みがちな「盲人の杖」ではなく「盲目の杖」それ自体として読むことである。作者の意図や背景からでなく、作品それ自体を読み解くのが現代文学の在り方なのだが、その精神に従えば、盲目の杖はより直截に「盲目である杖」として読めるはずである。そのように、この作品を「盲目の杖」と読むとき、「雪解け水の音」が、外部というよりはむしろ杖の芯部から立ち現われていることが解る。その上で今度は杖自体に考えをめぐらしてゆく。広辞苑によれば杖とは「歩行の助けに携える細長い棒。転じて、たよりとするもののたとえ」とある。そうであるなら、なおさら「盲目の杖」から生じる意味世界は、この混沌とした世界の在りようとも激しく重なる。とはいえ、そのような暗黒世界にも未来への明かるい兆しがないわけではない。それが「雪解け水の音」なのである。

現代俳句鑑賞

網野月を

流氷原ときに巨(おお)きく波うてり
出産の牛に纏わり春の蠅
寄居虫の貝より出せばすぐ死せり
鳥獣の骨に囲まれ鷲巣立つ

中村和弘

（『俳句』5月号・流氷より）

第一句は標題「流氷」の三句のうちの一句である。特に第一句は「流氷原」の景の特異性を描写している。接岸の際の流氷同士のぶつかりあう音響まで聞こえてくるようである。

第二句以降の三句は、生きるものの背負う境遇を捉えている。突き放したような言い回しなのであるが、生きることの現実を描写して余りない。作者の冷徹な眼差しが、恐ろしいほどのリアリズムを創出している。

ぶらんこを使いたき子に見られおり

杉浦圭祐

（『俳句』5月号・春の川より）

中七の「使いたき」のぶっきら棒さが、甘い感情を廃している。「子」への同情や一方で今まさに「ぶらんこ」に乗っている子への感情を寄せ付けないでいるようだ。作者自身が乗っているのか、第三者的視座を以って、乗っている子と、待っている子を俯瞰しているのかは分からないが、景への視線の集中力が感じられる。他に「水面には別の桜が映りけり」がある。

夢ひとつ空に投函して遅日

宮﨑斗士

（『俳句』5月号・2分7秒より）

「夢ひとつ」なのである。この作家の夢は、一つや二つではないのである。いくつかの夢の一つを空へ向かって放ったのであろう。いつも発想の豊かさとその発想のオリジナリティーに驚愕する作家であり敬服する作家であり、筆者の憧れの作家である。鬼籍に入られた恩師への夢の報告なのかも知れない、と勝手に想像してしまう。他に「チャーハン作る2分7秒永き日の」がある。

新緑の空の遊ばす雲ひとつ

鈴鹿呂仁

（『俳句四季』5月号・巻頭句より）

俳創の大きさを感じずにはいられない句である。ある意味で俳句の境地を極めているということである。爽快さ、大きさ、心映えの見事さが一句の中に集住している。句中の遠近法が効果抜群でもある。

水脈をたどる山行新樹光　小林貴子

（『俳句四季』5月号・水脈より）

座五の季語「新樹光」を導き出すような構成である。もちろん上五中七の句意が作句の主眼であって、「山行」の修飾語としての措辞は十二分なのであるが、その上五中七が座五の季語の内に時空間の設定をされていて、完結しているのである。「新樹光」は後から斡旋したのであろうと推察するのだが、「新樹光」がはじめにあったとしたら……、作者に伺ってみたいのである。他に「ちろちろと甘え寄り来る蛇の舌」がある。

炉語りやみんな燠火に手をかざし　小林布佐子

（『俳句四季』5月号・冬銀河より）

アイヌの笹小屋（チセ）をテーマにしている連句の中の一句である。そこで「炉語り」なのである。その「炉語り」に集まった面々は、既に消えかかっている「燠火」に「手をかざし」ているのである。笹小屋の景を叙述するだけではなくて、人間のちょっとした所作に人間性の本質を描き出している。

橋架けて向かうに夏の来てゐたり　雨宮きぬよ

（『俳句界』5月号・新作巻頭3句より）

実景なのであろうが、深読みの出来る句でもあり心象を詠んだ句とも解釈できる。上五の「橋架けて」は実際の事なのであろうか。「橋」はどのような橋なのであろうか。心中の想いを向う岸へ渡したら、くらいに解しても良いのであろうか。兎にも角にも、「夏の来てゐた」のである。一年の盛期を迎えようとしているのである。これから架けた「橋」を渡って、「夏」へ踏み入ろうとしているのである。創域の縦横無尽、天地無尽の感がある。

裸木を目に筆圧を加へけり　依田善朗

（『俳句界』5月号・自選30句「幻」より）

「筆圧」は描いているのであろうか。それとも書いているのであろうか。分明では無いのだが、「裸木」にインスパイアされている作者を想像する。結局、作句すること自体が、自然界をはじめとして、自らが勇気づけられたり、癒されたりするためのもののように感じさせてくれる一句である。他に「己が影抱き込む蝗冬に入る」「郵便の誤配一月はや二十日」がある。

手を握るだけの御見舞い桐の花　石口りんご

（『俳句界』5月号・鳥居より）

上五中七の「手を握るだけの御見舞い」の意味するところを考える時、見守る立場の者の心情を余すところなく語っているように思う。饒舌にならず、そして舌足らずさを感じさせないでいる。それにしても座五の季語「桐の花」に救われる思いがある。

自選二十句

原田秀子

百年の暖簾を守り切山椒

白き灰はらりと落ちぬ余寒かな

小夜更けて聴きてもみたし雛の伽

瑞垣の彼方より利く丁子の香

酒林躱して飛ぶや初つばめ

一碧の空を水面に春の色

地鎮祭聞こし召したか大蚯蚓

ボレロ高まりレモンソーダの泡躍る

口遊むラビアンローズさくらんぼ

半跏趺坐背に音きく桐一葉

魚の背に耀ふ一葉水澄めり

チェリストの鼓動つたはる処暑の宵

カイゼルの髭蓄へし秋茄子

覇者いづこ墳丘わたる秋の風

悠久の古墳を望む新松子

大皿をカンバスにして河豚の華

復水を飲ませてみたし枯尾花

庫裏深く忘れ箒や石蕗の花

炭の尉そつとそのまま春隣

春愁ひ疾うに微温みし紅茶かな

水明賞受賞者ノオト ――――〈原田秀子〉

上州のキラ星

星野和葉

先ずは、水明賞おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。心待ちにしておりましたので本当に嬉しい。

秀子さんとは、平成二十八年六月「野ばらの会」に来られてからのお付合いである。三人だけの野ばらの会に熊谷句会から五名の方が参加して下さって、賑やかで楽しい句会になった。ご自宅から浦和まで一時間半もかかるという。毎月一回であるが頭が下がる。それより一年前二十七年六月に近藤徹平さんのお誘いで、熊谷句会及び水明に入会。この熊谷句会には高校の同窓生が五名もいらっしゃるそうでびっくりです。そのあたりからの句を探してみよう。

つま先の細き白靴いそいそと
鵲の橋ぞゆかしき逢瀬かな
空鋏ひとつ鳴らして霜囲
上州の風に日干しの白だるま

いずれも句会報である。「つま先」の句が初めて載った句で如何にも初心者らしい。「鵲の橋」は多分兼題「七夕」で詠まれたと思うが鵲の橋はすばらしい。「空鋏」は冬に対して作者の物淋しさが現われている。「上州の風」は初めての特選句という。絵付け前の白だるまが並んで干されている景であるが、ここに上州の風を吹かせた事により景が生き生きと大きくなった。しかし、これらの句は水明集には見られない。二十八年八月号にやっと見付けた。いきなり五句欄に。

白き灰はらりと落ちぬ余寒かな
春愁ひ疾うに微温みし紅茶かな
花街の賑はひ知らぬ柳の芽
指揮棒の先で五月の風をどる
うつむきて木の葉がくれや柿の花

投句は五月末と思うが「余寒」など二月に詠まれた句も混じる。温存していたのだろうか。白き灰は囲炉裏で尽きた備長炭の灰と聞く。作者の家には古い囲炉裏があるそうだ。折角入れた紅茶が冷めてしまう程、物憂い事があったのだろうか。指揮棒の先で跳ねる風、季語五月が初夏の柔らかな風を思わせる。柿の花を見る観察力により上手く句にまとめている。その後は毎月五句欄に登場している。

大浅間光る白筋春動く

あめんぼも上州育ちビオトープ
北風に上州女肌理の荒れ
寒林や狭間より見ゆ大浅間
画眉鳥の囀四方を独り占め

今、お住まいの所から浅間山が望めるという事であり、ビオトープ、上州女の肌荒れ、画眉鳥と地元で身近な句材が沢山ある。我眉鳥も近くで見られる様で「いい声で鳴くんですよ」といろいろ話してくれる。

三代の家例を守り鶏雑煮
ピザ届く今宵は晴れて女正月
数へ日や厨を仕切る歳時メモ
漸くに主婦の座譲り三が日

三代の家例をしっかり守っている作者、お嬢さんご夫妻との四人ぐらし、持ちつ持たれつの円満なご家庭である。休める時は遠慮なく休める秀子さんである。

今年酒封切る夫のえびす顔
櫂なくも船漕ぐ夫の日向ぼこ
揺り椅子の眠りを誘ふ膝毛布
蕎麦掻を尋ね秩父路直走り
草取りに夫手作りの低き椅子

ご主人をしっかりと支えていらっしゃる。その妻の優しい目差しが句にあふれている。そして兼題に「蕎麦掻」が出れば、秩父の方まで車を走らせて下さる優しいご主人である。又、時には草取り用の椅子を作って下さる。そう言えばご主人のくるみ細工は素人離れしている。筆者も根付けやペンダント等頂戴している。

沸き上がるブラボーコール夏の夕
チェリストの鼓動つたはる処暑の宵
ミサ曲にしばし忘るる残暑かな
「月光」を揺り椅子で聴く春日向
身に入むやカザルスの弾く鳥の歌
琴の糸ぷつんと切れし秋夕べ

音楽関係の句が目につくと思ったら、予期した通りの答が返って来た。秀子さんは、お琴をかなりの所まで修得なさった様であり、ピアノも弾かれるようだ。そしてお嬢さんご夫妻はヴィオラを、お孫さんとご主人様はヴァイオリンを弾かれるとか。明るく楽しいご家族である。

化学式諳じてみる河豚の毒
復水(ふくすい)を飲ませてみたし枯尾花

ご主人共ども薬科大出身の秀子さんならではの句であり、納得の句である。お若い時の薬剤師勤務から後に薬局を開かれたそうだ。甲斐がいしく働く秀子さんが目に見える様だ。

これからは「季音花欄」でのご活躍をお祈りしています。

自選二十句

曲淵徹雄

初蝶の抗ひつつも恃む風

裸婦像に兆す胎動春うらら

春の鳶ま昼の月に舞ひ唄ふ

春の夜退屈男参上す

竹の秋開かずの門の脇に道

暮れきらぬ窓を打つ風菖蒲風呂

時の日や指先で聴く己が脈

打水の締め思ひきり天へ打つ

火蛾遊ぶ昭和の匂ふこの辺り

梅雨夕焼暗渠の水の哮りをり

秋めくや涼やかに灯を映す水

点滅の止まぬ門灯秋暑し

夕風や星一つ生む大花野

秋暁の蹠を恋ふる古畳

徳利の尻の軽さよ走り蕎麦

底晒しならぶ閼伽桶冬に入る

置きざりの松毬一つ冬の椅子

舞ひ終へてどれもよき顔初稽古

虎落笛煤の艶めく自在鉤

低くとも山の天辺冬青空

黒部の太陽

五明　昇

曲淵徹雄さんが生を受けた入善町は富山県の北東部にあり、黒部峡谷から奔流する黒部川が形成した広く肥沃な扇状地の中央に位置している。北は日本海に面し、雄大な立山連峰をバックに緑と名水に恵まれた自然豊かな故郷で、氏は実家の農業を手伝う傍ら学業に励み、詩心溢れる青少年時代を過ごした。黒部の山脈を仰ぐ田園風景や富山湾で獲れた「きときと」の魚は今も忘れられない思い出である。小学校時代は農繁期に合わせた「田植え休み」や「稲刈り休み」もあって、家族総出で農作業に精を出したと云う。

例会・句会での発表句から望郷句と思われる数句を列挙した。いずれも古き良き時代が偲ばれる佳句で、どんど焼も植田も峡谷での蜻蛉釣も「忘れ難き故郷」だ。

産土に根を張る炎どんど焼
ふるさとの畦の香よぎる草の餅
畦切れば嬉嬉と脈打つ植田水
朝日影とんばうの湧く峡の川
秋海棠小雨を被る父の墓
有磯海の冬は鈍色友送る

徹雄さんが水明俳句会に入会されたのは二〇〇四年四月、退職後にそれまでの週末テニスの他に何か趣味をと考え、大宮読売文化センター（当時、現りんどう俳句会）の門を叩いたのが契機である。爾来星野紗一、出井一雨、星野光二、山中順子、山本鬼之介師の薫陶を受け、俳句修業に邁進することになった。六年間の雌伏期を経て、水明誌上に投句を開始したのは二〇一〇年一月。その後第三例会（二〇一六年）、新樹の会（二〇二一年）へと活動の舞台を広げ、地道な精進を続けられた結果、今回の栄えある水明賞受賞に至った。ちなみに俳句と同時期に始めた太極拳は既に師範として活躍しており、まさに文武両道を極めた向学の士と言えよう。

カラカラと笑ふ卒塔婆秋高し
初時雨瀞に棹さす下り舟
沼に射す入日の水脈を浮寝鳥
花筏人情噺を生みし橋
軽暖や解体すすむ町工場
一叢の雨後の昂り昼の虫

水明賞受賞対象句から数句を抽出した。「カラカラと」の句は秋彼岸の墓参の光景か、乾燥した卒塔婆が秋風に吹かれ

ている様を活写、「初時雨」の句は時雨に急かされて長瀞峡を下る観光船の姿が目に見えるようだ。「沼に射す」の句は散歩コースの別所沼での珠玉の一瞬を切り取ったもの。「花筏」の句は初代三遊亭円朝が創作した古典落語「文七元結」吾妻橋の場に花筏を取り合わせて秀逸である。「軽暖」は初夏のやや汗ばむほどの暑さをいう季語だが、気怠い陽気の中、解体工事の進む町工場の哀感が漂う一句だ。「一叢」の句は雨の止むのを待って一際賑やかに鳴き始める昼の虫の生態を見事に捉えている。いずれも視座の確かさと季語の選択の的確性が光る作品と言えよう。

春の夜退屈男参上す
打水の締め思ひきり天へ打つ
夕風や星一つ生む大花野
徳利の尻の軽さよ走り蕎麦
置きざりの松毬一つ冬の椅子

「自選二十句」から物語性のある数句を抽出した。黒羽二重の着流し、深編笠姿の旗本退屈男が現れそうな月もおぼろな春の夜、打水の終いの一杯を天へ投げ打つ游冶郎、大勢のハイカーで賑わった花野の暮れ際に西の空に輝く一番星、走り蕎麦を待つ正一合の田舎酒、恋人たちの長い語らいのベンチに残された松毬一つ……。ユニークな場面設定と大胆な措辞で、一場のドラマを生み出すのは徹雄俳句の真骨頂だ。

大仰に啼いてみせたる初鴉
鳴く亀を彫らせてみたし甚五郎
影おとす沼のさ緑夏木立
秋暑し寺領に晒す古瓦
おほつぴらに軋む江の電冬めける
棚上げにしたるてにをは燗熱く

氏の近詠作品の中から、特に印象に残った数句を掲出した。大袈裟に鳴く鴉も初鴉とあれば目出度さの内「鳴き龍」や「鶯張り」があるのだから、甚五郎に「鳴く亀」を彫らせてみたいとはよくぞ言ったり。沼のさ緑や寺領に晒す古瓦は句材としては秀逸だ。江ノ電の軋みを「おほつぴら」と見たり、助詞のあれこれよりもまずは熱燗との主張に同感する。

徹雄俳句の特徴は俳句の基本を忠実に踏まえながらも、理屈に走らず、平明かつ率直でおおらかな表現に徹している点にある。おそらくその源泉は、氏を育んだ故郷入善の豊かで温かな自然と人情にあるのではなかろうか。

氏の俳句に対する信条は、四季折々の自然や生活からの刺激を鋭敏に感じ取り、それを基に楽しく句作を続ける事にあるとのこと。太極拳と同じように肩の力を抜いて、ゆったりと俳句が楽しめるようになるのが目標だと云う。今回の受賞を跳躍台にますます精進を重ね、水明を代表する俳人に成長されることをお祈りしたい。

自選二十句

保坂翔太

蕗の薹車中に満つる秩父の香

強東風の波頭の彼方白き富士

花衣互ひに褒むる八十路かな

渓谷をつなぐトロッコ山桜

本校へ片道五キロ春の山

落武者の裔の集落蕨干す

軍配は甲斐か越後か柏餅

水田に映る新樹を股のぞき

天王山に新手のやうな今年竹

日盛の棚田に指を入れてみる

夏座敷松を彫りたる大欄間

封印の話を母が星祭

糊効きしワイシャツの襟秋の朝

安らぎし祖父母の訛り零余子飯

ひとり居の日合の酒や十三夜

紅葉散る足湯に大根足が百

大晦日鶏捌く考の顔

飛騨染めの竜いきいきと寒晒し

冬木の芽胎児が腹を蹴るごとし

日脚伸ぶ山が落暉を持ち上ぐる

翔太句にしてしまう作法

網野月を

氏の作品を拝見すると姿勢の正されたものを感じ取るのは筆者だけではないだろう。リズムが正調であること、使用する単語一つ一つの吟味が行き届いていること、そして斡旋する季語への造詣の深さなどが、受賞対象になった令和三年「水明集」に掲出された六十句を改めて読み味わうと判然としてくるのだ。

次にその六十句の中から十三句を鑑賞しながら、氏の創作の世界へ少しでも迫ってみようと思うのである。

蟋蟀や秒針響くひとりの夜

構成はオーソドックスである。「蟋蟀」「秒針」ともに聴覚に関するもので、その音から「ひとり」を導き出している。「どこから来たのか、何者か、どこへ行くのか」の問いに匹敵している。

ひとり居の日合の酒や十三夜
安らぎし祖父母の訛り零余子飯

「ひとり」で居ることと自分自身の中に流れる血脈に先祖返りすることの関係性を良く表している二句である。前句は「ひとり居」を哀しいと思っていないのである。「日合の酒」と「十三夜」がある意味での作者の楽しみを演出している。次句では、上五の「安らぎし」は「訛り」よりも「祖父母」という自分のルーツの存在感に安堵しているように筆者には読める。もしかしたら既に鬼籍に入られているのかもしれないが、それなら尚更記憶の中に在る「祖父母」の存在感を「訛り」から引き出しているという構成になっているからである。加えて座五の季語「零余子飯」の実存性が際立ってもいる。

初恋は胸中にあり雪達磨

氏の作品に「恋」のテーマ句は少ないかも知れない。発表句でも句会でも出会うことは稀である。掲句は希少な一句ということである。ただやはり「雪達磨」でおさめている。躱したというか、もしかしたら逃げたのかも知れない。

弟に九九教へけり草萌ゆる

「弟」のように身内を指し示す単語が使用されることがある。掲句は実態をともなっていないようである。もちろん、

発想の原点は実景であり、実態なのであろうけれども、「弟」を突き放して表現していて、客観化しているのである。つまり読み手における「弟」のイメージを引き出すように工夫されている、ということであろう。

本尊の陰でとよもすちちろ虫
初蝶の風鐸かすめ相輪へ
海峡の大橋越えて初蝶来
ダイビングの翡翠を撮る豆博士

以上の四句は、いずれも一句仕立ての句作りになっている。一挙に座五の季語へ向かって落とし込むようにまとめ上げた「本尊の」「初蝶来」、季語から始めてその主体の動きを追っている「初蝶の」は、三句ともに一直線のリズム感覚が奏功している。中七の季語に修飾語を配して主体「豆博士」の対象として捉えている「ダイビングの」は、より複雑な構成である。「翡翠」「豆博士」がイーブンな関係性を有していて、二つの軸を一句仕立てで共存させているところは、翔太マジックということが出来るだろう。大概の場合は、精神分裂的な句意に陥ってしまうところなのである。

本校へ片道五キロ春の山

中学校に進学して小学校時代の分校から中学校の本校へ通うようになった春の一日ということであろう。筆者が勝手に句の中に込められている物語を想像したのであるが。子供の足では一時間以上はかかるとみてよいであろう。それにしても「春の山」は気持ちよく進学の気分を引き立てている。季語の斡旋が句を働かせているのだが、それ以上に句の世界観を季語「春の山」で決定づけていると言うことであろう。

水田に映る新樹を股のぞき

氏は滑稽句も作ることがある。このジャンルへのチャレンジはこれから大いに期待するところであるのは、筆者だけではない。句のベクトルの方向性を増やすということは、もしかしたら一時的に端正な姿の句作りを壊すことになりかねないのだが、時として飛躍する好機をもたらす事にもなるであろう。

封印の話を母が星祭
花白粉留守番の子が鏡台に

前句の「母」は、客観視した母のことなのか？実母のことなのか？は分明ではない。どちらとも解釈してよいのであろう。どちらにしても座五の「星祭」が効いている。次の「子」についても同様である。子というものはなにか？実子なのか？は分からないのだが、上五の季語「花白粉」が中七座五の句意を導き出している。季語への理解が的を射ているだけでなく、正調のリズムが季語との平衡感覚を担保しているということであろう。

今後の大いなるご活躍を期待しております。

山本鬼之介　選

水明集

さいたま　渋谷きいち

棘の木によくぞ架けたる小鳥の巣
江戸指物の文机ひとつ雁帰る
指切りの爪の半月春愁
春昼や風がゆるりと百姓家
草餅や厨の壁に火伏せ札

村杉清吉

賛成の挙手のごとくに松の芯
鍬入れの仕草たをやか植樹祭
返球に御辞儀が返る夏隣
松の芯青年の香を潜めをり
寝返りを打ちて目覚むる夏初め

さいたま　梅澤輝翠

江戸切子二つ並べし春の宵
春の海大漁旗を振る母子
春風に任せて舟の櫓を持たず
細腰（さいよう）の女将に会ふに桜貝
「細雪」ひもとくひと日花は葉に

元田亮一

粛々と風の流るる竹の秋
磯遊び沖に留まる貨物船
蘆の角かつて渡しのモニュメント
拝殿の窪みに寄する春の雨
鈍行のまた抜かれたる暮の春

上尾　横山君夫

囀や女子寮いまだ寝静まり
花冷や人出少なき陶器市
ふらここを漕ぐやぐいぐい女児無敵
ふらここや夫の育休けふ限り
旅の湯に身の解れゆく春の宵

さいたま　染谷正信

右書の虎屋の暖簾利久の忌
しくじりは男の誉れ松の芯
裏返る蛙に臍はなかりけり
長堤に牛の寝そべるみどりの日
屋根裏は男の根城春の蠅

春天に高く響けよレクイエム
春の宵「悲愴」の楽に沈潜す
海峡を勢ひ勢ひて桜鯛
引出物開く夢あり桜鯛
おぼろ月神秘のベール開きたし

さいたま　山岸久美子

窓辺より琴の音ほのか春の昼
太鼓橋休日つなぐみどりの日
冴返る屋根裏部屋の画学生
補陀落か海の彼方の蜃気楼
春宵やワイングラスを満たす赤

反町　修

花の昼舞台の景は桜狩
春陰や悲運の武将ねむる墓
春愁や声の掠るる弾き語り
点になるまで見送るバスや風光る
豪勢に沿道飾る藤の花

平塚　丸屋詠子

三叉にダイヤの如き巣鳥かな
春うらら津和野の鯉の大欠伸
鳥の巣を宿す大樹の五百年
春昼や腹這ひで聴く「キャンディーズ」
草餅に指紋とらるる峰の茶屋

さいたま　新　暦文

故郷の墓へと吹かむ春の風
紙風船ぽんと弾むよ外は雨
閉店日なれど名物桜餅
季春の出窓映画半券二三枚
晩春列車そんなに急ぐことなかれ

さいたま　菅原真理

遥か沖見据ゑる少女緑立つ
麦青むペダル漕ぎゆく女学生
青麦の畦を歩けば風生まる
小瓶の中にあの日の君と桜貝
追憶は淡くいとほしさくら貝

熊谷　越田栄子

春惜しむ沈む夕陽に時あづけ
山吹の枝の絡みをそつと解く
春暁や麻酔の醒めて夢現
春昼や風土記しるべに蛇の池へ
銀色に雨後の水滴照る柳

さいたま　清水桂子

草餅に丸き背の母偲びをり
茂る葉を鳴らしゆく風小鳥の巣
鳥の巣へ枝を銜へて急ぐ鳥
綾取りのやさしき指よ春愁
春昼や五百羅漢に笑む男

篠﨑紀子

紅の傘染めたるや春の雪
荷揚げ待つコンテナ船や春の昼
誰か吹く鶯笛をしら雲に
春逝くや遍路の鈴の遠くなる
間延びせし和尚の法話遠蛙

さいたま　池田珪子

麗かや記念ホールの藤娘
紙を敷く家の中までつばくらめ
蓬餅先づはにほひを嗅いでみる
草餅を包む仕種が母に似て
指先を出せば子燕五羽の口

新井孝麿

老農のどつかり坐る春の土
雛納め戦禍を記す新聞紙
参道の奥行深し花曇
桜冷え獣固まる檻の隅
老桜の幹黒黒と鎧武者

本橋稀香

木の間より出づる鞦韆川向う
飲食禁止立札よそに花の宴
囀や森いつぱいの愛の歌
田水張る日に三合の米感謝
たんぽぽの黄に泰平を祈りをり

春日部　仲田利子

ニコライ堂の鐘の余韻や春の夕
遠富士を背に見沼を歩く春の昼
春の昼篠突く雨の湖面かな
二条城の塀にそびゆる若緑
隅田川春の一夜の屋形船

さいたま　千坂平通

新たなる出会ひに馴染み春深む
若草や大地のいのち立ち上がる
真つ先に若草を食む放ち馬
左巻き右巻きさぐる藤の蔓
香を纏ひ大藤棚を通り抜け

岡田宣子

「安い安いよ買つてらつしやい」風船売
春風と連れ立つ旅や桃源郷
卓袱台の笑顔の頃や桜餅
踏まれたる音の弾くる春の葱
地平線を浅葱にそむる春の風

西幅公子

草木瓜や線路に響く貨車の列
花冷えの町に煙突酒造跡
水路越え芹摘む母と子らの声
風船のふはりとあがり子は背伸び
山吹やむかし詰襟新教師

越谷　阿部幸代

失恋してもまた恋すればよし桜餅
禅寺の抹茶一服桜餅
晩春や夕日一筋日本海
ピアノ連弾駅構内の暮の春
風弾く窓にびつしり散り桜

さいたま　竹澤和子

手のひらに覚えし文字を書く四月
喇叭水仙詰襟高き応援団
夕ざくら奈良にはあらず飛鳥山
桜貝波の引くたび浜に散る
冷戦の影忍び寄る花曇

小林京子

かげろふや沈み橋ゆく郵便車
玉響の威風侘しき種案山子
囀や二時間待ちの観覧車
阿と吽の狛犬まとふ杉の花
酒の出る蛇口有るらし万愚節

伊奈　菅原卓郎

遠き友より細字の手紙さくら季（どき）
細川紙なる短冊や春深し
晩春やもの寂しげな温泉街
晩春の利根源流の瀬音かな
つれづれの話をつなぐ桜餅

さいたま　森下美智枝

リハビリの仕舞に散歩桃の花
春雷や寄せ植ゑの芽の五つ六つ
句会場探す春野や掲示板
行く春や杜にひつそり能楽堂
永き日や古本あさる神保町

さいたま　加藤でん治

朧月記憶のうすれ少しづつ
花街の狭き通路や朧月
春色の溢るる菓舗のショーケース
一日を短かくしたる大朝寝
緩みくる鍬の楔や日の永し

若狭　山﨑郁子

初蝶や新婦の父の燕尾服
おぼつかな稚児の摺足鎮花祭
春の風邪寄席芸人の網タイツ
青き踏むハングライダー風に乗る
ビストロの旗を隠してミモザ咲く

さいたま　森美枝子

菩提寺の四百年忌や春の風
春風を背に菩提寺の大師像
財をなしたる働蜂の雄雄しさよ
名にし負ふ働蜂の行き来かな
花人や他人行儀に行き交へり

杉戸　佐々木史女

拍手の願ひ数多や亀の鳴く
ありありと河津七滝山葵沢
咲き満つる桜並木の果て見えず
関所めく石にさ迷ふ花筏
試歩に添ひ一周の園花ぐもり

さいたま　斎藤みよ

東風強し樹肌を撫でて過ぎゆけり
梅東風や白きシューズを新調す
卒業試験未来を懸くる青き空
大試験難問に手の止まりけり
児らの笑み回転寿司のフリージア

後記朝香

古窯に残る煙突桜舞ふ
桜舞ふ水車の砕く陶の石
行く当ての無くて戸惑ふ花筏
聞くだけの講義淡々亀鳴けり
亀鳴くや海を見下ろす山の夕

伊予　向井章子

咲きこぼる母と見上ぐる藤の棚
母植ゑし庭の白藤香り立つ
つれづれに絵葉書を描く日永かな
春深し地蔵菩薩の笑ひ顔
暗黒の穀倉地帯春の雷

さいたま　木村るみ子

つくづくし赤子つんつん宙を蹴る
春雷や眠る海馬の動き出す
象の持つ絵筆とんとんうららけし
夜桜の膨らみて我つつまれむ
花束の一本反りしチューリップ

川崎　鈴木玲子

竹の秋藪もちあぐる風の波
竹の秋里には里の幾百年
地を蹴るや仔馬天馬になりさうな
まづ母を見て馬の仔の一歩かな
クレソンの水滴緑空緑

さいたま　川田政代

卒業子写真にも出る品の良さ
墓石の黒きにぽつかり春の雲
春筍の一品料理唸る客
春の雲富士を囲みて居座りぬ
戦ひの終りは見えず桜散る

山戸美子

手折り来し八重山吹に遺影笑む
鈴の音が響く朝の竹の秋
入相の鐘の音を聞く白山吹
在所では座敷の長押まで燕
小社の天狗の鼻に春の蝶

飯田忠男

吾妻橋舟待つ宵の草の餅
花筏平然と行く水鳥よ
囀や萌黄の色の旅鞄
ガジュマルの島の廃校囀れり
囀の出迎へ森の美術館

草加　外村紀子

ふらここの子等が背押す老後かな
ぶらんこや母の手払ふ利かん坊
大木の根城を守り囀れり
朝まだき囀やまず目覚めけり
町中に囀を聴く平和かな

春日部　諏訪サヨ子

嫁ぐ日の朝餉小さき桜鯛
影踏みをさせぬつもりや朧月
桜鯛ま顔で我を品定め
敗因もお国訛りや春野球
朧月見知らぬ路地を歩かせり

川口　新井のり子

細腕が今や太腕はる日傘
風光る渡つて楽し沈下橋
山寺の白山吹に入日さす
山吹や水車小屋ある里に雨
駅ピアノ子と連弾の春の夕

さいたま　野村美子

つぼ焼の最後の汁の喉越よ
長閑なりお屋敷町のピアノ音
長閑けしや景満喫の一万歩
霞立つ頂上だけの富士の山
春愁や鏡の前の寝起顔

さいたま　武田重子

朧月潤ひ初めし大地かな
祝膳や尾鰭立派に乗込鯛
記念日に目出度し紅の桜鯛
惜別の情慰むる朧月
紅帯びて季節に因み桜鯛

遠西勢津子

校庭を走る花びら始業ベル
白白の遠山桜雲なせり
途切れては続く桜や旧街道
追ひ追はれ谷戸田せましと恋鴉
一本の梢取り合ふ恋鴉

茨城　山岸弘子

待ちし間に味ふくらみし桜餅
花に寄せ自作の曲を弾き語る
めつきり減りし和菓子屋見付け桜餅
春のセールの水着買ひしも身に合はず
春の風スカーフ飛ぶも気にとめず

さいたま　小川洋子

若草の丘子供らのすべり台
くるりくるくる桜吹雪につむじ風
勤務あとほつと見上ぐる夕桜
戦争のライブ中継万愚節
上州の山影険し花の冷え

吉川　杉浦理恵

藤の花羽音と共に八百年
一寸が五尺となりぬ藤の花
続きをる紫すだれ藤の花
春深しうたたねの夢ピンクなり
春深しカップ選びてミルクティー

さいたま　小駒さち子

右頬に春愁の指菩薩像
鳥の巣の幾つもありぬ鳥団地
鳥の巣やレター入れたきその巣穴
草餅や耳朶ほどの柔らかさ
春昼や午後の日課の物憂くて

鳴海順子

桜咲き赤子白き歯生え初むる
梅の香に庭の草木も目覚めけり
桜散る景はかなしや花吹雪
夕餉には西京漬の鰆かな
ほつこりと寿司屋の湯呑み鰆あり

石浜悦子

背景に富士山入れて芝桜
一円を拾ひ届くる四月馬鹿
象つなぐ鎖短し青嵐
孫と猫の名を間違ふる万愚節
露天湯に男の声やみどりの夜

さいたま　田中泰子

花筏淀みの先は崖つぷち
連弾の指先ひかる春の宴
雪柳白きせつけんのにほひかな
線路傍たんぽぽの黄の点々と
散るさくら浴びて進みしローカル線

東京　畑宮栄子

暮の春十歳若く生きよといふ
春昼や紙面報道釘付けに
切株は時を刻むか桜咲く
人の世の難問とけず暮の春
花吹雪手に取り飛ばす至福かな

和歌山　南條きわゑ

閉ざされし心開きて春帽子
お互ひに脚を揉み合ふ花疲れ
お百度を踏む女の背に散る桜
あどけなき頬を撫でゆく散り桜
傘寿の友白寿を看るや豆の花

嶋田洋子

コトコトコットン森の水車の春めきぬ　さいたま　綿貫ひさの

なつメロの絡繰時計春の空
瞬きの暗号解けぬ春の星
「愛」と「恋」論争中の春の暮
春深し昭和の消印ある封書

旅立ちの祝の膳の鰆かな　鈴木香音子

散歩道のよき道しるべさくら草
振りかざす拳にさはさは竹の秋
路地路地を行きつ戻りつ花盛り
花吹雪鳥の声さへ飛ばしけり

晴天に何を拗ねゐる捩れ花　小山敦子

捩花や内なる憂さの意思表示
嘘泣きを素知らぬふりで梅雨の明く
桧の桝の角にくちづけ冷し酒
砂日傘ざらりと溶くる角砂糖

長尺のエンドロールや春深し　横山礼子

春の闇夜間飛行の音何処
春深しフェイスシールドもどかしや
巡礼の鈴とユニゾン藤ゆるる
深更の藤棚の下異界めく

迫り来るヘッドライトや朝霞　さいたま　湯浅　和

飯蛸をつまみに隅のカウンター
のどけしや鯉の尾びれがゆつたりと
黒文字で腸を引き出す焼栄螺
のどけしやおこせし土の黒々と

振袖に留袖揃ひ春の雲　東京　山中いちい

涙ぐむベールの花嫁花水木
空を向き笑ひさざめく花水木
花水木振る手の白き分れ道
瀬戸内や入り日に染まる春の雲

古木にはクロニクルあり蘗ゆる　さいたま　樋口元美

花街の花簪や藤揺るる
目眩く芳香放つ藤の花
春深し隣の猫の朝帰り
解体の重機轟音春行けり

目玉白黒栄螺の腸を吐き出す児　鈴木藻好

愛猫に付き従ふや径長閑
牧のどか雄牛の顔が「ぬー」と出る
廃橋の下で釣糸垂らす春
植ゑ替への時期あれこれと日永かな

案内はお国言葉よ初緑
若緑足湯を覗き立ち寄りぬ
畝立ての先の若松甲斐の山
写り込む手水の水の若緑
どつしりと琴柱灯籠松の芯

東京　飯室夏江

ありし日の友と囲むや諸子汁
彼岸入りしばし忙し竹箒
抜歯して春の寒さが身に沁むる
地下工事終りいよいよ地虫出づ
彩りの消えて淋しき雛納め

さいたま　水野興二

数本の花見に満足車椅子
岩清水くぐりくぐりて山葵かな
傷痛む亀よ一緒に鳴いてくれ
ご近所の桜の大樹塀が邪魔
施設内も皆春向きの顔となり

川村　治

街かどを歩く鴉や春深し
春更けて杣道進む足の裏
芦屋浜浅蜊を掬ふ淑女かな
まてさざえはまぐりあさり焼きにけり
たこ焼の潮のかをりや花曇

秋谷風舎

パンジーの花束ブラームスワルツ
風船を放てば天へ昇りゆく
濃紺の空に満月八重桜
晩春の鎌倉の宵原節子
紙風船絵本ままごと雨の日は

宮代　関谷多美子

負けん気の仔馬の白き鼻柱
大き目の跳ぬる仔馬に青き風
風向きを捉ふる仔馬耳聡し
美術館出でて上野の森おぼろ
永代橋の青く浮かびて月朧

さいたま　森　和子

画数の合ふの合はぬと桜餅
五、六人並びて買へり桜もち
マンドリンの弦を緩めて朧月
春昼や口腔体操真つ最中
永き日の整地に生へたる営業マン

和田仁八郎

連日の迷惑メール蝌蚪の群
自転車ごと大転倒す暮の春
暮の春長期のローン終了す
むずむずと五指の靴下暮の春
待望のケーブルカーや花の寺

和歌山　髙橋満耶子

囀に囃されながらゴミ出し日
花万朶渡しの跡に石碑たつ
青麦や心新たに赴任地へ
パパと手をつなぎ入学一年生
風にのり心とともに花ふぶき

北方の飛翔体落つ春の海
避難民溢るる国や花疲れ
春炬燵ドラマのごとく戦地見ゆ
春雨や女が銃を持つ異国

花びらの敷き詰むる径春の果
コンサート前の華やぎ春夕べ
かけ声の響く球場草若し
若草の間合ひを埋めるすみれ色

やはらかな風にすくすく若緑
雨風に耐へし若松天を突く
山寺の石段に添ふ初緑
春の服ハートの形にスパンコール

花水木の淡紅透ける蒼き空
北国の空押し上ぐる花水木
港湾へ下る街路や花水木
和菓子屋の五代目の冴え彼岸餅

鬼石　榊原聰子

さいたま　吉川拓真

鈴木敦子

緒方みき子

霜多光代

雨降りて人しづかなり花の道
亀鳴くやエレベーターに我一人
亀鳴きて深夜放送まだらなり
川底を喪の色にして蝌蚪の水

春浅し地図に赤丸付けてをり
野仏のまなこにこたふクローバー
桃の花昔話のにあふ村
待ちあはす二番ホームよ風薫る

四月馬鹿セーヌの流れ見てゐたり
四月馬鹿赤きドレスでワイン酌む
飽きもせず庭の陽炎見つめをり
雲一つなき青空や花水木

公園のさくら俯く今朝の雪
肝冷やす電力逼迫春の雪
転勤の息子の運転花の旅
転勤の前日は婆と花めぐり

牧場に母馬の後追ふ仔馬
朧月過ぎし十九の時忍ぶ
仔馬立つ牧夫に引かれ親馬と
朧の夜予感がさえて届く文

東京　柳父はる

さいたま　安藤みえこ

高原和子

藤沢　小島喜代子

さいたま　落合和枝

同窓会花びら浮かぶ野天風呂
行く末を語りつくして四月馬鹿
子と犬と遊歩道行く花水木
四月馬鹿好きになつてと云えなくて

さいたま　山下ユリ子

八の字の足を運ぶや夏祭
風孕み麦の秋ゆくペアルック
軽やかに下駄も踊るよ夏祭
賑はひて産土神は麦の秋

福田育子

すてられぬ宝石箱の桜貝
母恋し都忘れの濃むらさき
はれの日の衣装決まらず花曇り
浅蜊汁売り声今も残りをり

川島夕峰

桜貝若き娘の爪に似て
やよひとはやさしい響き弥生とは
桜散る薄桃色の道となり
ミモザ咲けネモフィラ開けウクライナ

奥山粉雪

住む人の途絶えて久し竹の秋
里山の札所六番竹の秋
竹の秋世に出づ秩父ウイスキー
藤棚の立ち話待つ散歩犬

岡田芳春

花月夜令和の平和かみしむる
春の灯に天突く祈りウクライナ
つくし野へ心病みたる嫁さそふ
お酒より楽しとわらひつくし摘み

大阪　飯塚智恵子

初宮の泣き笑ひ知る老桜
白木蓮木馬の軋む氷川杜
律儀なる夫五十四本薔薇の束

さいたま　山崎真由美

振り塩の溶けゆく青の鰆の背
幼子の祝ひの膳や焼く鰆
定年の先を見据うる竹の秋

橋爪さなえ

花見かな貧乏神も服を着て
傘二本老いたる犬と春の旅
暖かや子は待ちきれず風の中

草加　持永喜夫

春の空徐々に賑はふ浅草寺
使命終へ下がる房々藤の蘂
藤城家姓にこだはり藤を植う

さいたま　糸井しるく

若草のたはむる姿思ひやる
若草や黄色帽子と戯るる
滝桜目の前にして声のなし

小田美智

ぶら下がること楽しくて桜桃　所沢　関根千恵

瞬きの長い睫毛のソーダ水
缶ビール開けて恋歌弾き語る　さいたま　河井育子

若草を衝立として羽繕ひ
シャラシャラと夫研ぐ庖丁春は行く
流行物（はやりもの）終るが如く春は行く

水明通信　二十一世紀

寺内洋子

三月の関西定例会も通信になりました。いつまで続くコロナ禍ぞです。届いた句稿のなかに「きらきらと序曲はじまる猫柳」というのがあり、猫柳の今昔を思い、同じ感慨をお持ちの方もおられるかもと文章にしてみました。

いつも行く図書館の中に福祉関係の施設が経営する小さな食堂があり、店先に彼らが作っている野菜やお花などが並べてあります。昨年その中に猫柳が混じっていて、友人と買い求め一年間楽しみました。今年も「ぼちぼち季節やで」と行ってみたらコロナのせいか残念ながら日曜はお休み。近くのスーパーに買い物に回ったらあったのですが……。まっすぐな茎で長さは一メートルほど。茎の色も黒み掛かった赤で、いかにも園芸品ですという顔をしている。どうしても猫柳が欲しい友人は購入しましたが私は断念しました。これは猫柳やないでと。ひょっとしてこういう種類があるのかもしれませんが、頑固な年寄りの私はご遠慮申し上げました。こんな風にして年寄りは時代に取り残されていくのでしょうか。

長兄夫婦も旅立ち、実家は何年か前から無人で長らく帰省していません。野山に大きな変化はないと思う反面、あの猫柳ももう絶えてしまってるかもとも。

俳句

8月号予告

7月25日発売

予価1,040円（本体945円）⑩

特別作品　西村和子・齋藤愼爾・井上弘美

大特集

あらゆる場面で役に立つ！

俳句の効用

▼座談会　俳句のちから……山下知津子×渡辺誠一郎×岸本葉子×関悦史

▼世界の俳句……堀田季何

▼句会のたまもの…星野高士／西川火尖／杉田菜穂

特別企画

隠岐の楸邨

楸邨にとって隠岐とは／後鳥羽上皇『遠島百首』解説／『雪後の天』『隠岐紀行』解説／鑑賞『隠岐紀行』

追悼エッセイ

鈴木節子

句集特集

松野苑子『遠き船』

付録

季寄せを兼ねた俳句手帖 秋

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

作品評

山本鬼之介

指切りの爪の半月春愁　渋谷きいち

指切りは、子供などが約束のしるしとして小指と小指を曲げて互いに引っ掛け合う行為で、『指切りげんまん嘘ついたら針千本のーます』と誓い合う。子供なら可愛らしいが、大人となると複雑で、後々厄介な問題を招く原因にもなりかねない。この句の指切りの一方は、若く艶のある女性であってほしい。その相手は、句意から想像を巡らすと中年以上の歳の男性ということになるだろう。作者も充分その資格がある。指切りの時に眼に入った女性の指には、指の半月板が大きくくっきりと現れていて、とても印象的であった。指切りをして彼女と別れた後、こみ上げてくる歓びとともに一抹の不安が胸を過ぎったのである。

返球に御辞儀が返る夏隣　村杉清吉

公園の中で子供達が野球を楽しんでいる。同年齢の頃の自分をなつかしんでいた作者の足元へ、捕球し損なったボールが転がってきた。球を追ってきた少年に作者が拾い上げたボールを投げ返してやると、その少年が野球帽を脱いでから、『ありがとうございます』と元気な声で丁寧に礼を言い守備に戻っていった。ひと日の小さな出来事に大きな喜びを抱き家路につく作者であった。

江戸切子二つ並べし春の宵　梅澤輝翠

一個ずつ丁寧に仕上げた値打のあるカットグラスを見た。記念日を迎えた夫婦の晩餐であろうか。夫の好物を念入りにつくった料理でテーブルが華やぎ、取って置きのワインとそれに見合った切子グラスが用意された。庭園灯に照らされた若葉がリビングルームの大玻璃に映り、こよなきムードを醸し出している。最高の小道具「江戸切子」が演出する春の夜の一幕である。

鈍行のまた抜かれたる暮の春　元田亮一

とある私鉄の普通電車だけが停車する駅である。ホームに留まっている電車を次々と追い抜いて行く電車。先ず特急、そして急行・準急と、遠慮会釈もなく追い抜いて行く。今日一日をゆったり過ごそうと、敢えて空いている各駅停車に乗って目的地へ向かう作者であろうか。苛立つこともなく、通過する電車を見送りながらの泰然自若振りである。「暮の春」

がこの大らかな人物像と季節感を描き出している。

轉や女子寮いまだ寝静まり　横山君夫

先ず女子寮であるが、居住者の対象となるものには、女子大の学生・総合病院の看護師・民間企業の工場勤務者など、幾つかのパターンが浮かんでくる。さて、本句の場合はどのような人なのであろうか。その答は、「いまだ」に隠されているような気がする。作者が朝の散歩をしていて、以前からその建物が〇〇の女子寮であることを認識しており、その時間になってもまだ静まりかえっている状態に、やや気持が苛立っているのである。起床時間に対する作者と女子寮居住者との意識のずれを思う一句である。

屋根裏は男の根城春の蠅　染谷正信

いわゆる屋根裏部屋である。辞書的には西洋建築に対しての言葉であるが、和風建築では中二階に相当する部屋である。天井が低く、夏はかなり暑くなるだろう。子供の頃、遊び仲間で林や森の中に秘密基地を作ったように、大人になってからは屋根裏部屋を秘密基地にしている。オタク的な収集物を日々眺めて悦に入り、誰にも邪魔されず独りの時間を愉しむ部屋である。蚊と同様に嫌われる蠅であるが、夏の蠅のように活発でなく、男同様屋根裏を愉しんでいる。

春の宵「悲愴」の楽に沈潜す　山岸久美子

チャイコフスキーが完成させた最後の交響曲と言われている交響曲第16番ロ短調・副題「悲愴」のことであろうかと思うが、俳句の中で「曲」ではなく「楽」と表現したところに、この曲に対する作者の並々ならぬ思い入れがあるように感じる。そして、「沈潜」という日常会話では使われないような重い言葉によって、外界の音を遮断して「悲愴」に没頭している様子が示されている。

窓辺より琴の音ほのか春の昼　反町　修

窓を開けた書斎に、何処で弾いているのか琴の音がかすかに伝わってきた。琴の奏者が弾くような流暢なものではなく、習っている琴のお浚いのような感じである。もどかしさはあるが何故か心地よい。知らず識らずその音源に引き付けられているのであった。季語がその場の様子を醸成している。

点になるまで見送るバスや風光る　丸屋詠子

特別な日を迎えた家族が乗ったバスを見送っている。ことの成就を祈り、次第に遠離り視界から消えるまでそのバスを見送っているのである。「風光る」が見送る側の心の高まりを表しているように思う。

鳥の巣を宿す大樹の五百年　新　暦文

樹齢五百年と言うとかなりの巨木であろう。その樹に毎年鳥が巣を作り、新たな命を送り出してゆく。樹と共存してきた鳥であり、また、鳥と共に成長してきた樹の歴史でもあろう。自然界の雄大さをつくづく感じる一句である。

季春の出窓映画半券二三枚　菅原真理

漢字の中に平仮名が一文字という異色な俳句ではあるが、内容はなかなかお洒落である。映画や芝居の半券を、その日の記念に残しておく人の行為であり、出窓に然り気無く置かれている映画の半券が、フランス映画のワンシーンのような雰囲気を作り出している。「季春」の響きの佳さが効果大。

小瓶の中にあの日の君と桜貝　越田栄子

季語の「桜貝」は、その色と形、そして、殻の片方ずつが浜に散らばっているという状態から恋の追憶に繋がり、どうしても甘い俳句になり易い。掲句もその例外ではないが、切ない思いを素直に判ってくれる人に聞いて貰いたいと訴えているように思えて聞き役になった。この句の佳さは、小瓶という小道具を用いて、そこに具象物の桜貝と、実らなかった恋の相手である抽象物の君とを存在させたことである。作者の眼には、君の姿が朧気に見えているのである。

春惜しむ沈む夕陽に時あづけ　清水桂子

過ぎゆく季節を惜しむ気持は四季を通じてのものかと思うが、やはり春については特別な思いが生ずるのではなかろうか。丘の上から水平線に近づいてゆく太陽を観ている作者を想像した。やがて太陽が水平線に接し、夕陽に染まった海にその偉大な姿を少しずつ没してゆく。不動の姿勢で観察を続けていると、半分が消え、とうとう頭を残すだけとなり、遂に日没の時を迎えた。日没とともに春も去って行くような淋しい思いに駆られたのである。

綾取りのやさしき指よ春愁　篠崎紀子

この指は当然綾取りをしている相手の指であろう。紐を掛ける時、掛けられる時、相手の男の指の優しさを感じている。指が長いとか綺麗だとかの外面的なことではなく、指が発する無音の語りかけかと思う。しかし、繰り返す指の動き以上にことが発展せず、女の心が波立ち始めている。

紅の傘染めたるや春の雪　池田珪子

紅の傘に対する春雪の取合せが実によい。融けた雪が傘の色を染めてゆくのである。明るめの紅が深紅に変わってゆく

ように察する。春の雪を相手に、紅色の傘一本で立ち向かう軽業師を観ているようで、実に気持のよい俳句である。

指先を出せば子燕五羽の口　　新井孝磨

毎年同じ燕がやってきて軒に巣を作り、子育てをする家。その家の主が巣の中に指を差し出すと、餌と思ってか小さな嘴を出して突く。数えてみると子燕は五羽いるようだ。満足気に頷く主。やがて成長して外を元気いっぱい飛び交う子燕たちの姿を思い浮かべて笑みをこぼす。

雛納め戦禍を記す新聞紙　　本橋稀香

雛の節句が終り、「また来年ね」と声を掛けながら雛を一体ずつ紙に包み箱に仕舞ってゆく。新聞紙を使っての作業かと思うが、その新聞にロシアがウクライナを攻めているニュースがでかでかと載っている。しばし手を止めてウクライナの人々に同情の念を寄せ、反面我が身の幸せな現状にほっとしているのである。最近、ロシアとウクライナの戦争を題材にした俳句が多く食傷気味であるが、本句は「雛納め」を季語にしたことで、月並み俳句を脱することが出来た。

木の間より出づる鞦韆川向う　　仲田利子

川岸に居て対岸を眺めていると、川岸に茂った樹木の間から何かがリズミカルに飛び出してくる光景が見えた。やがてそれがぶらんこであることに気付いた。判ればどうということでもないが、最初はちょっと驚いた。そんな自分を自ら笑ってしまった。

隅田川春の一夜の屋形船　　千坂平道

昔のさぞ長閑であったと思われる大川とは全く景観を異にした隅田川ではあるが、赤い提灯で飾り、そよ吹く風の中を行く屋形船は、なかなか乙なものである。乗り合わせた人々の人柄や、表には出ない人生観など、一つの船の中に色々なものが渦巻いていて興味を引く。

左巻き右巻きさぐる藤の蔦　　岡田宣子

人の頭の旋毛の左巻き右巻きも然る事ながら、植物の蔦や蔓の巻き方も気にしだすと切りが無くなるのではないか。藤の蔦を探った結果は如何に。ちょっと気になるところである。

地平線を浅葱にそむる春の風　　西幅公子

北海道の大平原を想像する。一直線の地平線が浅葱色に変わってゆく時刻は夕方であろうか。作者は、変えるを染めると表現し、染めてゆくのが春の風だとロマンチックに詠んだ。

水琴窟

（水明集五月号鑑賞）

池田雅夫

大吉を財布にたたみ初詣　森下美智枝

「初詣」に出かけ、おみくじを引いたのだ。一年の吉凶を判断するのだが、めでたい「大吉」をだいじに財布にしまい込んだ。参拝のあとにおみくじを買ったのであろうから、語順としては「初詣」が上五にあるのが自然だと思う。

しやぼん玉握りしめたる詩人かな　吉川拓真

のどかな春の風物詩としての「しやぼん玉」。無数のしゃぼん玉が日の光で七彩となり空中を漂い、消えてゆく。何の不思議を感じないが、詩人の目には千変万化に写り、無意識のうちに掴んでしまった。詩人の特異性を引きだしている。

漣に音符つけたし春の海　外村紀子

蕪村の『春の海終日のたりのたりかな』の句を思い浮かべる。静かな波間を行き交う舟ののどかさが感じられる「春の海」。一方、宮城道雄の箏曲『春の海』も脳裡を過る。弧を描く汀の音の心地よさ。音符をつけたことにしてもよい。

一筆の優しさ伝ふ賀状かな　水野興二

パソコンによる賀状作成が容易になり、手間もかからなくなった。反面、画一的な文面と活字の味気ないものにも思える。そこで一筆を加える人も少なくない。人柄がひしとでる。

苦虫をかみつぶしゐる春羅漢　田村福美

すべての煩悩を断ち、自力で悟りをひらいたという阿羅漢様。仏教の修行者の最高の地位である。五百羅漢の表情はどれ一つとして同じものがないという。その中には憂いの顔、「苦虫をかみつぶした」ような顔の羅漢もあるだろう。

二月尽猫のまるみのゆるみたり　山下ユリ子

「ねこはこたつでまるくなる…」の歌にもあるように、猫は暖かいところを好む。炬燵や日溜りで丸くなっていた猫も二月が終ろうとするころには寒さもゆるみ、ようやく本来の愛らしい猫に戻った。猫の行動で二月の終りを表現している。

草焼くや出直し誓ふ落第生　鈴木藻好

早春の野の枯草を焼き、害虫駆除をする。灰は肥料になる。焼かれたあとの野からは逞しく草が芽を出してくる。「出直し誓ふ」からは、とある試験に再挑戦する意欲が感じられる。焼かれた草々の生命力になぞらえた決意が表われている。

スキージャンプ明暗わかつ二センチよ　高橋満耶子

冬季オリンピック北京大会が終って数ヶ月。コロナ禍の影響で無観客で行なわれた。白熱した戦い、記録に競技の厳しさを思い知らされた。飛距離百メートルを超えるジャンプ競技も、わずか一センチの差で明暗が分かれてしまう。

春泥をつま先立ちで歩きけり　高原和子

雪解けや雨などでぬかるみができる。道々の低いところはとくにはげしく、通ることもままならない。滑りやすく、思わぬほど深かったりもする。「つま先立ちで歩きけり」には、春の泥に困っているというよりは、楽しんでいる観がある。

探梅や野鳥を探るファインダー　水落守伊

冬の殺風景に飽き、早咲きの梅をたずねてきた。枝いっぱいに咲いている梅の古木。野鳥の楽園と化し、しきりに啼いている。その声の方向にカメラを向けシャッターを切るのだ。梅を愛で、さらに野鳥を撮ることができた至福の時である。

堂々と狭庭に一景初鴉　小島喜代子

中七の8文字を工夫したい。「初鴉」は元旦に見る鴉のこと。庭の木に止まり、美声であるかの如く鳴きたてているのだろう。その堂々とした態度に圧倒されたのであろう。

味自慢の主婦の歳月ぶり大根　嶋田洋子

海岸線の長い和歌山県。黒潮が接近し漁場としても名を馳せている。「味自慢の主婦」とは、ご自身のことだろうか。長年の経験にうらうちされた味は「ぶり大根」のてり、色に表われている。ぶり大根で一杯なんて、乙なものである。

二枚目の鼠小僧の頬被　武田重子

「頬被」でも、寒さを防ぐためのものではなく、泥棒の頬被とは意外である。それが「二枚目」とあるので、芝居の上のことと推察できる。寒さを感じさせない頬被に心が温められる。芝居を楽しむ姿が目にうかぶ。粋にかけ声などを。

残雪の光をはなち兼六園　森山洋子

加賀百万石の城下の「兼六園」。日本三名園の一つである。そして、冬の「雪吊り」は風物詩となっている。春を迎えた兼六園の残雪。暖かい日射しにわずかずつ解けてゆき、水となって光を反射している。「残雪の光」が際だっている。

密になり何をかたるか黄水仙　小田美智

「黄水仙」は三月の季語に分類される。南ヨーロッパ原産の黄水仙は日本の水仙より大きく香がある。「何をかたるか」の疑問形より事実、断定の語ではっきりさせたい。

網野月を選

山紫集

永き日や竹針で聴く「蚤の歌」　原田秀子

永き日や大仏の腹がらんどう　森　和子

緒のゆるき下駄はいてゐる日永かな　松井由紀子

棟梁のちどり足なる日永かな　梅澤輝翠

作業衣の汚れの目立つ日永かな　野口和子

永き日やキャラバン進む絹の道　反町　修

永き日の鸚鵡は鍵を外しけり　大場順子

きつかけは日永の話題腰鋏　青木鶴城

花手水愛づる日永の蔵の町　越田栄子

日永かななつかしき本読み返す　鈴木和子

――以上特選

寄せ書きの顔が浮かばぬ日永かな　山岸弘子

振り駒で先手を決める日永かな　山田美佐尾

瀬戸の海船渡り行く日永かな　山中いちい

田舎道歩き歩きて日永かな　湯浅　和

二駅を歩いて帰る日永かな　横山君夫

永き日やこころは未だ女子学生　横山礼子

ふくろうの瞼も重き日永かな　新　暦文

日永かな道草誘ふ古時計　阿部幸代

永き日に柿落としの鏡獅子　新井孝麿

暮遅し帰りたがらぬ散歩犬　荒井倶子

電線に烏が一羽日永かな　飯田忠男

永き日や見知らぬ人と立ち話　池田雅夫

シネコンに五時間も居て日永かな　石川理恵

乗り過ごし又うたた寝の日永かな　石田慶子

好天を世情に篭る日永かな　井関礼子

高からず女物干す日永かな　井上燈女

難解なアプリ操作の日永かな　井口俊晴

永き日を部活か若き声通る　上戸千津子

ふはふはのシフォンケーキや日の永き　内田恵子

雉鳩のほうほうほつほ日の永し　梅澤佐江

花生けて嫗の茶飲み日永なり　大塚茂子

立読みのめくる音そつと日永かな　岡田宣子

日永し又外飯とスマホ見る　落合和枝

永き日や数学だるい五時限目　加藤でん治

小庭ながめコックリとなる日永かな　川村　治

ワイシャツの袖繕ひて日永かな　木村るみ子

女子会の話は尽きず日の永し　熊倉千重子

影ふみを覚えし童日永かな　河野はるみ

永き日に細字の臨書料紙映え　小駒さち子

日永き浜に並びし太公望　後藤綾子

あんちゃんの啖呵滔滔聞く日永　近藤徹平　永日やひたむきに人生きてこそ　関谷多美子

永き日や孝丹精の庭眺め　斎藤みよ　永き日や太宰愛せし跨線橋　瀬戸雄二郎

日の永し長編小説挑戦す　笹本啓子　喰ふて寝るだけの晩年日の永し　染谷正信

永き日や死は微笑んで待つている　佐藤克之　永き日や波やはらかき東京湾　高島寛治

日永し読み返す「太陽の季節」　渋谷きいち　秘密基地に時を忘るる日永かな　髙橋満耶子

幸せは花殻摘みの日永かな　下川光子　植木屋の日永まかせの鋏音　武田重子

恙なく迎ふる老いの日永かな　菅原卓郎　永き日や今日の釣果もままならず　田中章嘉

うとうとと何処も静かな日永かな　菅原真理　気がかりの濃厚接触者に日永　鳥羽和風

早起きも陽に先越され日永し　杉浦理恵　饒舌の富山の薬屋日永し　飛永　鼓

庭園の池一回り日永かな　鈴木藻好　湘南のサーフボーダー永き日や　外村紀子

牧水の歌碑苔むして日永かな　鈴木玲子　かくれんぼ出づる機逸す日永かな　仲田利子

御披露目の孔雀くるりと日永かな　諏訪サヨ子　日永かなペルシャ絨毯夢心地　南條きわゑ

むずかる児預かり居りて日永かな　西浦千枝子
永き日やぐーんと伸びる縁の猫　西幅公子
生ひ立ちの行間を読む日永かな　野田静香
郷里へと車窓楽しむ日永かな　野平美紗子
永き日や染体験で泥だらけ　野村美子
永き日の砂場に出来るチョモランマ　橋本京子
鳴く声の探す眼の日永かな　樋口元美
重箱の隅の論戦日永かな　日高道を
お喋りの果てぬ鸚哥の日永かな　福田千春
足弱に帳尻の合ふ日永かな　藤澤喜久
一村を埋む一天の花吹雪　古池恵里子
永き日や御息所の大欠伸　保坂翔太

学校の歴史の札を読む日永　曲淵徹雄
永き日や時差の隙間に微睡みぬ　正木萬蝶
縁石に掛けて日永を婆二人　町野広子
日永かな返事不用と追伸に　丸山マスミ
校門に女子ぺちゃくちゃと日永かな　宮崎紫水
永き日や句作り横に吟詠を　宮崎チアキ
永き日や太巻供ふ道祖神　村杉清吉
永き日や動物園に西東　本橋稀香
サイフォンの珈琲たぎる日永かな　森川義子
採りてすぐ竈で茹でる日永かな　森下美智枝
遮断機のゆつくり上がる日永かな　森本早苗

山紫集作品評

網野月を

永き日や竹針で聴く「蚤の歌」　原田秀子

ムソルグスキー作「蚤の歌」の正式名称は「アウエルバッハの酒場でのメフィストテレスの歌」である。昨今は、アナログのLPがリバイバルしていて、竹針の需要があるようである。それはさておき、アナログの情趣が「永き日」の本情に担保されている。ゲーテの原詩にムソルグスキーが加筆した「ハハハ、へへへ」のメフィストテレスの笑い声が、永日の夕暮れに聞こえてくるようだ。

永き日や大仏の腹がらんどう　森和子

秀抜である。作句の技法的な分析から言えば、中七座五の句意と上五の季語「永き日や」の取り合わせは、つまりこの句の配合は、まったく異なるものを合わせて緊張感を生むやり方とは、真逆の構成を持っている。「永き日や」と「大仏の腹がらんどう」の質感の相似形からくる大らかな句柄の演出に成功している。季語「永き日」に取り合わせる場合、やはり本句のように質感の類似性が必要であろう。敵対する句意と季語と言う構成は「永き日」には相応しくないのである。取り合わせ＝配合の技法を使用する場合の、優れた教訓として本句を推奨したいほどである。

緒のゆるき下駄はいてゐる日永かな　松井由紀子

「緒のゆる」さを感じ取っていながら、この主人公は構わないでいるのだ。普通、下駄や草履は緩んだ鼻緒を嫌うもので、足のつま先が下駄や草履の前部に食み出しているほど不格好なものはない。嘗て江戸っ子などはそうした不細工な形を毛嫌いしていたものである。ではあるのだが、「日永」故にそうした事態が許されて、アンニュイな時間を楽しんでいる主人公がそこにいる。

棟梁のちどり足なる日永かな　梅澤輝翠

「ちどり足」と言うのだからこの「棟梁」は聞し召しているのである。やはり「日永」をより強く感じるのは、午後の時間帯であり。夕方なのであろう。だからこそ建前が早く仕舞になって、家路を急ぐ「棟梁」の「ちどり足」が見えてくるのである。句の構成は「棟梁のちどり足」か修飾語として「日永」を形容している。前句「緒のゆるき」、後句「作業衣の」同様にいろいろな「日永」があるものである。

作業衣の汚れの目立つ日永かな　野口和子

嘗ての作業衣はグレーが大半であったように思う。欧米での作業衣は普通青色であった。比して最近の作業衣はカラフ

ルになった。デザインも豊富で普段着として来てもカジュアルに着こなすことの出来るものばかりである。それだけに「汚れの目立つ」ことはひと際人目を引くこととなったのであろう。そんな「日永」なのである。作業衣の主が「日永」故にという文脈ではなくて、その「汚れ」を見出した「日永」の作者なのである。

永き日やキャラバン進む絹の道　　反町　修

「キャラバン」つまり隊商が「絹の道」つまりシルクロードを行く景を「永き日」の中に捉えている。東アジアから中近東へのシルクロードの一体どのあたりの景であろうか。最近は日本の国内でも「絹の道」の名称を使用するようであるが、どうしても中央アジア圏を想定してしまう。筆者は四十年前に北インドで隊商に加わって旅行した経験がある。その際は真夏であったので専ら夜の行軍であったが、春先の雨季ならば、夕方頃から動き出すのであろう。地平線に見え隠れする太陽を見ながら「永き日」を感受している。

永き日の鸚鵡は鍵を外しけり　　大場順子

オウムは人間の知能水準からすると四歳から七歳の知能を持っているそうである。当該のオウムはそれ以上の天才オウムなのかも知れないが、鍵を外すとは驚異の出来事である。さてそこで、上五の「永き日」がどれほど効いているかなのである。「短日」なら驚異の度合いが増すであろう。しかしながら、句意の主眼は其処にはないのである。「永き日の鸚鵡」と言いながら、「永き日」を感じ取っているのは作者自身なのであるから、如何に七歳の知能を有していても、「永き日」はオウムに体感できるのかは分からない。それでももしかしたらこの鸚鵡は、「永き日」に手持無沙汰を託っていたのだろうか。

きつかけは日永の話題腰鋏　　青木鶴城

座五に「腰鋏」とあるから、そこから人物像を紡ぎだすと、プロなら植木職人か、素人なら植木の手入れをしている方が思い浮かぶ。「日が永くなりましたねえ」の一言で、立ち話に興じている作者と「腰鋏」の人物の景が見えている。

花手水愛づる日永の蔵の町　　越田栄子

上五の「花手水」は一体何処にあったのであろうか。座五「蔵の町」とあるが、お寺なのか、商家なのか、一般の住宅なのか。兎に角、「蔵の町」が暗示しているのは古い町並みであろうと、筆者は想像した。その古い町並みの何処かに「花手水」が設えられていて、「蔵の町」並みにぴったりと合っているということなのだ。「日永」を最も感じる夕方の景であろうと考える。

日永かななつかしき本読み返す　　鈴木和子

「日永」に拠って幾ばくかの心のゆとりが出来たのであろうか。そうではあるまい、「なつかしき本」を「読み返」しているところで、ふと気づくと「日永」であったのであろう。

大村節代　選

鼓笛集

代掻くや矢庭に水路騒がしく
代田水映す山影風が消す
草刈の畦には甘き匂して

渋谷きいち

山城の堂堂たるや若葉風
星空や岸辺の宿の藍浴衣
軽やかにフレアスカート初夏の風

野村美子

うな重に肝焼二本五月富士
ポスターの大正美人生ビール
大の字や葭簀囲ひの寝転び湯

染谷正信

渓谷の気を纏ひつつ山女釣
山吹の揺るる水面や平林寺
田を渡る風の匂や五月闇

仲田利子

その葉先肌にチクリと菖蒲風呂
風薫るヘアドネーション子は終へて
白壁の影も揺れゐる薔薇真紅

斎藤みよ

好きなTシャツ着れる時なり更衣
新緑に吸ひ込まれゆくリフトかな
石段の先に若葉の大伽藍

森下美智枝

母の手を離さじと泣く四月の子
背に赤子泣く子腕に保父五月
迎へ待つ子ら口々に春の虹

本橋稀香

新緑や堂に声無き平林寺
豆かんの白蜜かるき薄暑かな
草笛の高音ずるる調律師

菅原卓郎

涼風や園児の寝相みな違ふ　反町　修
妻からの新茶味はふ巴里の朝
新聞のインクの匂ひ新茶汲む

野球少女いま自衛官柿若葉　榊原聰子
不意ついてつばめの巣より卵落つ
聖五月エコーの結果異状なし

春来る眼科の水槽賑やかに　飯田忠男
市場なく勝鬨橋の朝霞
アンニュイの香を残すフリージア

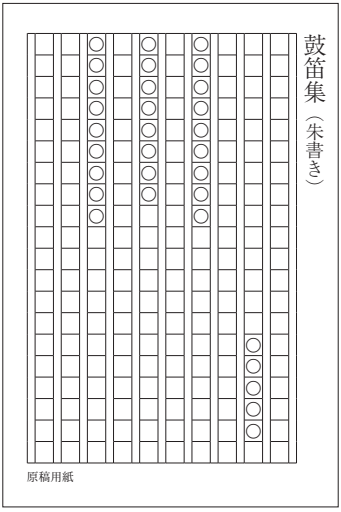
母の日のアルトソプラノコンサート　関谷多美子
長男次男祝福されて武者人形
燕の巣若きパン屋のドアの軒

走り梅雨再開発の街光る　横山礼子
母と娘と食券を買ふビアホール
薔薇の庭四つ眺むる帰り道

鼓笛集投句についてお願い

①原稿御依頼は順送りでやっております。
依頼がありましたら、折角のチャンスですので
必ず御出稿下さい。
②用紙は二百字詰原稿用紙を使用、欄外右上に
「鼓笛集」と朱書、右下に氏名をお忘れなく。

編集部


鼓笛集（朱書き）
○○○

鼓笛集作品評

大村節代

代掻くや矢庭に水路騒がしく　渋谷きいち

田植えが終って青々とした早苗田は美しく、誠に気持が良い。しかし田植えを行なうのには、色々と準備がいるようだ。代掻は田植え前の最後の作業という。矢庭にの表現で代掻きが無事に終わってほっとした様が伝わる。

掲句をはじめ、田の作業に特化した三句は、景が浮かび共感した。

軽やかにフレアスカート初夏の風　野村美子

新緑から梅雨入り前までの気持の良い季節五月。長い冬から解放されて、大人も子供も輝いている。新型コロナが終息しないので、手放しで喜べないが、それでも初夏の高揚感が伝わる。風にゆれるフレアスカートが楽しい。

ポスターの大正美人生ビール　染谷正信

日本で初めてビールが作られたのは、明治三年、アメリカ人ウィリアム・コープランドによるという。

掲句のポスターは大正時代のレトロモダンな雰囲気とビールという新しい飲物と美人がマッチして、評判となったのであろう。ちなみにビールの売上げは、昭和三十四年に清酒を抑えて一位になり、以降四十年間トップという。まずビールですね。

鼓笛集巻頭（六月号）

私の好きな一句（自句自解）　武田重子

桜貝稚の拳の柔らかき

私が俳句を始めた頃、六人目の孫が誕生いたしました。

赤ちゃんの柔らかい肌を撫で、ひとつひとつの仕草を幸せな気持で愛でておりました。

今も孫の成長を楽しんでおります。

第59回現代俳句全国大会

作品募集

投句締切は8月1日（必着）

現代俳句全国大会は、年に一度、現代俳句協会が主催して行う伝統ある大会です。協会員に限らずどなたでも参加できますから、例年にも増してたくさんのご応募をお待ちしております。

◆応募規定◆

□**投句料3句一組・2千円、何組でも可。**
ただし、新作未発表作品に限る。**［3組9句同時投句に限り、6千円を5千円にいたします］**
前書き不可。所定用紙使用。〒、住所、お名前、電話番号、協会員・会員外の別を明記。投句料は普通為替、定額小為替（無記名で）、現金書留（必ず作品同封の事）、又は郵便払込（郵便局の青い払込取扱票をお使い下さい）加入者名・福岡県現代俳句協会、振替口座番号・01770-4-14986 2・振替払込受領書のコピーを投句用紙に必ず貼付してください。

□**送付先** 〒807-0827 福岡県北九州市八幡西区楠木2-6-12 現代俳句協会全国大会 事務局 福本 弘明 宛 ☎093-602-6058

□**締切** **8月1日必着**

□**顕彰** 協会の会員誌『現代俳句』に優秀作品を発表するほか、協会刊行物に採録。

□**賞** 大会賞、後援団体賞、特別選者賞、秀逸賞、佳作賞。

□**全国大会** 令和4年11月12日（土）午後1時より、JR九州ステーションホテル小倉 〒802-0001 福岡県北九州市小倉北区浅野1丁目1-1 ☎093-541-7111

□**記念講演** 平出 隆 先生（詩人、多摩美術大学 名誉教授）「蕪村を中心に」

□**講評** 中村和弘会長はじめ協会幹部

□**懇親会** 午後5時より（会費6千円）

■**特別選者名**
和田喜多子 山崎喜代子 森前多代 前田喜代子 辻村ム 館ッ 鈴谷和 鈴木静 小田代 小林オ 小川子 桑原敏 柿崎弘 伊藤生 池田子 安藤子 後藤郎 筑紫章 久保美 永井雄 小林夫 対馬子 秋元貴 高野康 寺井子 中宮敏 宇佐美

■**一般選者名**
江中真浦聡弓川浦規智一聰浦田規密廣上田雄弘喜龍二弘田村二天明一二郎治子藤郎映美子篤章井夫子子敏オ子弘生子
植田安論類狼太彦志勉を羽
植垣規雄子智
植田嵐青寒秀王月四
岩野十手野野
今野鳳
井上東川
井石石五有有網赤
石十

瀬関関鈴清清島塩佐佐佐佐坂酒早衣小後後こしのゆみ神桑黒窪木木岸河川川川上鹿加春恩朧尾奥岡岡大大大大
間根戸鹿水水村野怒藤藤藤竹田井乙川山藤藤野田岩田村村木村村名崎窪又藤日田 崎山部田類西瀬石井
美 谷賀 女 ゆ マ 智つ益 侑 つ
陽道智呂 道 正文映 伸直弘文次貴岑昌紗和徳英き聡チ正香ぎ太青英知石布 竹源榮耕と健響雄恒
子豊子仁伶径正仁美子二彬一彦司子郎子生治こ希子将治こ雄子浩子お郎樹一子疼子潤詩丘一司む司史鬼行

花花長橋芳野根西西成並名中永中中中中長仲豊照出津佃津月千田谷谷田田田堅武滝高高高高高高高曾十
房谷谷本賀木岸谷池田木つ久村瀬里内内井井 長井口髙 久森葉村下口中中中阿田浪橋橋橋橋野木岡根河
八 川はる は井 み 里 井 彌
重 輝陽桃敏剛冬一邑づ清正十麦亮火洋 寒の 善永悦紀遊芳正一慎 朋亜放伸 将修健和公暢 宣
子清か久子花三周扇子人き流幸悟外玄星子寛蟬る翠子子夫代子醇義玄也陽子美心一武夫宏文彌一夫修毅洋

渡渡若米吉吉吉山山山山山山山山森森本村武宮味水的松松松松政堀堀堀星武船二福平日久播原原林羽
辺辺森田村田田本元本本田崎口口野須杉松藤崎元野場本本本田澤野之越田野馬越上富賀高行磨田 村
誠 春 志 鬼 木 真詩ひ す内 久 美
一和京規鳳成 敏津左之貴十富浦 康二紀斗昭星秀勇津葉ろ雅ず長胡季昌仁淑貴健節道保穹要雅 和
郎弘子子子子功倖香門介世生雄木稔蘭寿本子士次闇恭二子子む世子一流何彦裕子夫男代を徳鷹三子桂子

◆注意 応募規定に違反した場合は、発表後でも入賞を取り消すことがあります。

［主催］現代俳句協会 ［後援］文化庁・毎日新聞社・朝日新聞社・読売新聞社・西日本新聞社

俳誌望見

梅澤佐江

『春燈』　令和四年四月号　通巻九〇五号
主宰　安立公彦　発行所　東京都墨田区

昭和二一年一月、安住敦・大町糺が久保田万太郎を主宰として創刊。即興的抒情に生活の哀歓をこめて詠う。〔月刊〕

主宰詠「燈下集」五句より

蔵壁の午後の日色や春を呼ぶ

外壁を漆喰で仕上げた蔵造りの並ぶ通りを行くと、いつの間にか白さと明るさを増した午後の日の光は白壁をやわらかく包んでいる。五感を研ぎ澄ますと何処からか梅の香りも、春の訪れに心躍る作者である。

高階にあまた灯の色春めくや

掲句は、戦後の混乱の中で久保田万太郎主宰による「いくら苦しくなっても、たとへば夕霧の中にうかぶ春の灯はわれわれにしばしの安息をあたへてくれるだろう」という創刊の辞を想起させる。そのシンボリックな存在として高階に輝く沢山の明かり、その数だけ人々の暮し方があり、安息があり、春色が濃くなり万象いきいきとした春の喜びに華やぐ心も。高階に集う人々の艶やかな時間に春の気配を感じている。

やはらかに影の寄り添ふクロッカス

何と和やかな情景なのでしょう。クロッカスは霜や凍結にも負けずに寒い冬を乗り越えて咲き、一斉に花開く様子はまばゆいばかりで春の訪れを感じさせてくれる花である。「影の寄り添ふ」は喜びも悲しみも共に乗り越えて来られたお二人のお姿、「やはらかに」に穏やかでしなやかなお二人の有様が見える。どうぞ末永くお幸せに。

燈下集　自選　九六名　各五句より　主宰による選評

うみやまのしんと明けゆく阪神忌　西川保子
三度目のワクチンを待つ春を待つ　深川敏子
枯れてゆくもののしづけさ母の忌来　三宅文子
尾長鶏尾のながながと春を待つ　小張志げ
慎重に落款つくや明の春　菅原陽子

当月集　主宰選　三三名　各五句より

今生の余白しみじみ雪あかり　古谷昌女
おつとりと穏やかにはや三ヶ日　種田利子
笹鳴や色なき庭を明るうす　西谷恵美子

春燈の句　主宰選　二二二名　各四句より

水仙花一輪手折り友見舞ふ　山口陽子
餅花や百二の母を祝ぎぬ　立竹人
遠富士を窓にとどめて冬晴るる　萩原登代子

創刊以来同人制を布かず、一貫して論よりも作品重視の姿勢をとっている。安住敦の「花鳥とともに人生があり、風景のうしろに人生がある」を踏襲して来られた。「お正月特集」は日本各地の風物を楽しませて頂き、「わがまち逍遥Ⅱ（その7）夕爾の里　福山」と併せて「木下夕爾の百句⑯」により縁の地を訪れてみたくなる。春燈雑記「一輪の花」「獅子舞」、「一期一会㉘武島一鶴先生」等々、充実した誌面に本結社の伝統と裾野の広さを痛感し、読み応えのある誌面である。

句集喝采

近藤徹平

◆津髙里永子「寸法直し」

東京四季出版

著者略歴　昭和三十一年兵庫県生。「未来図」入会、鍵和田釉子に師事、「小熊座」同人、佐藤鬼房・高野ムツオに師事。「墨ＢＯＫＵ」「すめらき」代表。句集『地球の日』。著書『俳句の気持』。

建国日富士には煙突が似合ふ
とろろ汁富士を裾まで見たりけり
雪渓の童女となるや滑り落ち
歩みたき方角に径なき花野
寸法直しせずやしぐるるわが裾野
全天のオーロラに星揺るがざる

第一句は巻頭句、季語の建国日を活かし富士は日本の象徴、煙突は日本を支える産業の象徴と読めば「似合ふ」がよく効いた景の大きい句。第二句、とろろ汁は静岡県丸子宿が日本最古と自慢する名物。第三句、雪渓を登るには音なく襲う落石に前を注意し滑落せぬため足元も注意する慎重さが必須、著者の実体験か。第四句、花野の径の元は獣道だから致し方ない。第五句は標題句、座五の「わが」とは、著者が裾野の広い名峰に抱く敬慕の情の発露と筆者は読み取ったが如何か、視点を裁縫の屋内から名峰へ一気にワープする仕掛けが絶妙。第六句は著者が多数の国の多様な現場を訪れて詠んだ句から。

本句集は標題に相応しい工夫が凝らされた装丁で、各章には衿、袖等の衣類用語が配置され、楽しい世界へ案内する。

◆室井千鶴子「花曇」

本阿弥書店

著者略歴　昭和二十一年富山県生。同六十二年長沼三津夫に師事。平成二年「朝」入会、岡本眸に師事。同二十八年「朝」終刊。同二十九年「栞」入会、松岡隆子に師事。富山県俳句連盟幹事。

著者は「あとがき」に、友人の歳時記を手にしたとき栞が挟んであった花曇の言葉の優しさに心を惹かれたこと、父君が早世されたため家業を引き継いだ母堂が著者の高校入学式の帰りを桜の下で待っていた絵羽織の姿が今も甦ると記す。

母とゐる安けさに似て花の中
桃咲いて嬰へひと匙の潮汁
八十の姑がまづ入る大田植
流鏑馬の逸れ矢といふも拾はれて
宵待ちの山河鎮もる風の盆
海を見に来て残雪の劔岳
五箇山に婚の行列花曇

第一句は母堂と花の取合せ。第二句、孫が生まれる度に丁寧に描写。第三句は矍鑠とした姑殿を活写。第四句は富山県射水市下村賀茂神社の流鏑馬行事。第五句の風の盆は富山県八尾市の行事だが今や全国から人の集まる行事。第六句の劔岳は岩と雪の殿堂と呼ばれ一流登山家の命も時に奪う北アルプスの名峰。第七句は富山県南砺市の合掌造りの郷である五箇山の行事と花曇の取合せ。次も花を詠み込んだ句集か。

水明例会

第一例会（浦和）

境　延昭
茂木和子　報

鷗外の旧居の街の錦鯉　延昭
酔興に牛飼ふ男草茂る　〃
錦鯉とて世を睥睨のちからあり　光弥
薔薇の香に酔うて気の済むところまで　喜恵
ヒロインの妖しき目線錦鯉　徹平
竜宮はさぞやと思ふ緋鯉群る　和子
酔眼にまぶしすぎるよ夏の月　〃

――以上特選

牡丹のゆるるに酔うて眠りたし　順子
船酔ひに波止場間近ぞ夏の海　徹平
乙女らの軽装に酔ふ初夏の街　マスミ
賓客の色鯉愛づる池の彩　稀香
兼六園の緋鯉の池の暮れ残る　節代
夏の星野外ホールの楽に酔ふ　理恵
色鯉や金のラベルの化粧水　喜恵
草かげの揺るる水面や錦鯉　チアキ
権勢を誇る屋敷の錦鯉　延昭
夏髷物の佳境に酔うて抱き枕　光弥
緋鯉に名付けて撒き餌を若女将　和葉
麻酔医の胸ポケットにカーネーション　和子

第二例会（東京本所）　山中みどり　報

乃木坂に足かけ十年五月雨　士史
あけはなち風呼びこむや五月晴　〃
さび鉄や雨にはらはら樟落葉　〃
五月晴春筍の土吾子と拭く　則子
ひなげしを義母と摘みとり安房の野辺　〃
道端のポピー愛で行く親子連れ　敏江
柿若葉補助輪なしの真顔かな　〃
ポピーゆるる嬰の泣き声五月来ぬ　玲子
黄帽子の手をつなぎゆく五月雨　〃
連山の色太りゆく五月晴　鶴城
スキップで唱歌過ぎ行く五月雨　鶴城
ひなげしやヌード写真の壁に褪せ　竺仙
雛罌粟やポピーコクリコゆらゆらり　利子
雑草に紛れてもなほ虞美人草　峰雄
ひなげしや鉄の匂ひのモニュメント　みどり
子煩悩な力士金星五月場所　〃

――以上特選

五月晴人気のパン屋見つけをり　敏江
ひなげしの何時もどれかは揺れてをり　竺仙
夏ぼうし目深くひとりぶらり旅　道子
美しき嘘に乾杯虞美人草　鶴城
地図開き旅を楽しむ五月晴　玲子
鯉のぼり影も芝生を泳ぎけり　サカエ
一輪のポピー揺るるや駐車場　利子
戦火なほ赤きひなげし風に揺れ　淑江
垂れ蕾ポンと披きポピー空へ　則子
幼児らは喧噪となる五月晴　峰雄
葉キャベツのはみ出すばかりホットドッグ　米子
五月晴御櫓の箍を磨き上ぐ　みどり

第三例会（東京）

五明　昇
曲淵徹雄　報

薫風に和する棹歌最上峡　順子
薫風や筆勢をどる命名書　〃
モンブランのインクのブルー風薫る　喜久
汝が胸のクルスの弾む聖五月　萬蝶
薫風や此の世の旅をまだ続け　康世
薫風に仁王が癒す力瘤　昇

――以上特選

風かをる母校はいまも丘の上　萬蝶
薫風やふくらみ届く祝の文　順子
止まりし思考回路に風薫る　康世
抱つ子紐つけサラリーマン風薫る　理恵
歳時記を捲る薫風修司の忌　喜久
フェンスから挙りて顔を紅つつじ　徹雄
薫風を存分に享け宮の森　雅夫
若楓作務余念なき青年僧　昇

第四例会（浦和）

境　延
石井喜恵　昭報

夏立つや樹海の息吹胸ふかく　玲子
窓枠に朝日いつぱい立夏かな　由紀子
ペディキュアの足颯爽と立夏かな　マスミ
野の花を投げ入れにして立夏かな　順子
夕陽背に海女が掲ぐる大鮑　昇
法螺貝吹き山伏修行夏来る　光弥
陽に光る洗車のしぶき立夏かな　でん治
忌を修す立夏の水を惜しみなく　寛治

――以上特選

真つ白なシーツひらひら夏来たる　恵子
初採りの鮑高々挙ぐる海女　マスミ
庖丁研ぐひととき無心夏来る　でん治
少年の歯脱けの笑顔夏は来ぬ　光子
大樹のぼる水音太き立夏かな　順子
夏立つや水場に息ふ歩荷隊　昇
フォルティシモ磯笛を吹く鮑海女　修
夏来る利根大堰は満満と　寛治
鮑焼く手許あやしき芸妓かな　翔太
夏に入る俳句ポストの伊香保坂　暦文
鮑海女縄帯しめて胸ゆたか　美佐尾
夏来る子らの飯碗天こ盛り　延昭
薄造りしてもしこしこしこ鮑　由紀子
鮑海女帯縄解けば恋も生れ　光弥
潮騒や鮑噛みしむ今日の宿　玲子
けふ立夏グリーンサラダを山盛りに　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ　報

蕗の葉の終の住処に輝けり　水尾
植ゑて三年蕗の茂りや庭の色　〃
母の日や天地無用の荷が届く　義子
贈る喜び受くるしあはせ母の日や　はるみ
ナプキンの薔薇母の日の予約席　佐江
言葉とぎれし二人に香る蕗の雨　〃
母の日の母でゐる日の椅子の反り　〃

――以上特選

母の日や小さき母の子沢山　美佐尾
母の日や平らかに生き卒寿なり　玲子
暮れなづむ厨に蕗の茹で上がる　はるみ
鯖ずしや母の味なる母の日に　水尾
蕗剥くや徐々に黒ずむ指の先　宣子
板摺の蕗あざやかに茹で上がる　義子
白き手で蕗煮る女謎めきぬ　理恵
蕗洗ふさみどりの水輝けり　佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子　報

安達太良山に本当の空袋掛　マスミ
花橘姫街道の別れ路に　〃
袋掛仲直りする母と嫁　月を
麗しき少年の透く青簾　京子
この道に別の人生青蛙　鶴城
間の手に波音入り袋掛　はるみ
出会ひは赤別れは青きソーダ水　萬蝶
袋掛エデンの咎を覆ふかに　〃

――以上特選

袋掛Gパンの裾ゴム長へ　月を
垣根より少し食み出す袋枇杷　はるみ
装丁は五線の音符袋掛　倭子
また会ふ日楽しみにして袋掛　俊晴
袋掛姉さん被りすたれたり　ひろこ
好好爺ラジオ鳴らして袋掛　理恵
袋掛三代目となる児の無心　千春
島の春渡る人なき信号機　紀子
鬼瓦を擽る尻尾鯉幟　マスミ

日和なり人の手集め袋掛　京子
津軽富士を遠見の脚立袋掛　佐江
袋掛実習生の来ない村　慶子
袋掛ひとり娘の遊び癖　鶴城
新聞に異国の文字や袋掛　萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

麦秋や雲は魚や鳥になり　千津子
一力の風あたらしき麻暖簾　玲子
黒潮は大きく蛇行とりぐもり　満耶子
錆鎌研ぐ砥石のくぼみ麦の秋　道子
麦秋の地上絵となる轍かな　ゆら女
麦笛の雅楽に笑まふ道祖神　和子
風薫る志功の天女舞ふロビー　早苗
昭和一桁友の減り行く麦の秋　千枝子

――以上特選

讃岐路や喉（のんど）い辛き麦の秋　早苗
羨道の奥へとどける新樹光　玲子
麦秋や世事にはばまれ篭り居し　礼子
新緑や七市跨ぎて丹波路へ　千津子
風水も鬼門もなくてごうなゆく　ゆら女
単線の電車は一輛麦の秋　洋子
焦げ飯をよろこぶ助つ人麦の秋　和子
桐の花天守が見ゆる自刃跡　道子
夕つばめ宅地となりし休耕田　千枝子
母の日の母の眼力玻璃戸越し　千世子
診察券三枚ふゆる春の果　満耶子
麦秋や用語辞典に首つたけ　きわゑ

昔話あれこれ17

軽（かるのみこ）太子の密通

允恭天皇崩御の後は、木梨の軽太子が皇位を継承することになっていた。しかし、即位の前に、同母の妹軽の大郎女（おおいらつめ）に恋をし、夜を共にしてしまった。軽の大郎女はその美しさから衣通姫（そとおりひめ）とよばれていた。異母兄妹の結婚は許されても、同母の兄妹の結婚はタブーであった。

軽の太子は次のような歌を詠んだ。

あしひきの　山田を作り
山高み　下樋（したび）を走（わし）せ
下どひに　わがとふ妹を
下泣きに　わが泣く妻を
こぞこそは　安く肌触（はだふ）れ

（山が高いので、田に水を引くために樋を地下に走らせるように、こっそり私が言い寄る妻を、ひそかに恋い泣く妻を今宵こそは、長い間の願いが叶ってお前の肌に触れたことだ）

また、軽太子の歌

笹葉に　うつや霰の
たしだしに　率寝（いね）てむ後は
人はかゆとも
愛しと　さ寝しさ寝てば
刈薦（かりこも）の　乱れば乱れ
さ寝しさ寝てば

（笹の葉を霰が打つ音がたしだしと鳴るように、たしかに妹と寝た後は、人々が私から離れて行っても構わない。妹が愛しいと共寝したからには。
刈り取った薦が乱れるように世の中が乱れたって知るものか。共寝したからには。）

何と激しい恋の歌であろう。自暴自棄的でさえある。

（つづく　丸山マスミ）

各地句会

水明小川句会（小川）

花の色失せて堤は春惜しむ　きよ子
雨の日は無言の行で蕗を煮る　みや
今流行一人キャンプの野人かな　綾子
草野球ボール転転たんぽぽ野　栄子

水明鬼石句会（鬼石）

夏の星空つぼのバス過疎の町　和子
アカシアの花は小さき風にゆれ　ナヲ子
麦秋や犬にも径の好ききらひ　紀子
じやがいもの花薄紫の背比べ　洋子
母の日や自分のために花の苗　聡子

和歌山水明句会（和歌山）

石棺の鎌研ぎあとや麦の秋　和子
口笛がメロディーになり花は葉に　道子
走行車の窓開け放つ花みかん　千枝子

水面には水玉模様青葉風　千世子
団扇まきの型はハート唐の寺　満耶子
冷蔵庫の扉に明日のメニュー貼る　きわゑ
安珍の隠れし鐘や躑躅咲く　洋子
あんたがた何処から来たの赤翡翠　廸代

若狭水明会（若狭）

羽田より離陸のメール月朧　和風
佐保姫にアールグレイの香を立てて　初花
朧月五体宇宙に預けをり　鼓
笑みし母在る祥月や月朧　保人
朧月眼鏡かけたり外したり　郁子
佐保姫の白いベールの掠れゆく　白鷺
佐保姫や高くなれよとつまむ花　ことは
人去つて淋しさつのるおぼろ月　冬至
山笑ふ海ほかほかと峰の水　寛久

新樹の会（浦和）

夏はじめまだ空席の夜行バス　道を
湯上がりの青竹踏みや夏始　正信
初夏や襟元清に女学生　徹雄
実生より育てし大葉夏初め　清吉
実りある余生を過ごす夏初　平通
巣立鳥鳴き声いつか遠くなり　京子
そはそはと動き初めたる巣立かな　修
連山の色太りゆく夏はじめ　鶴城

雛の会（浦和）

真珠一粒胸にゆらして聖五月　燈女
五月美し水辺明るきカフェテラス　喜恵
千草色男まさりの単帯　輝翠
聖五月辞書の重さの手に嬉し　政代
蜜豆のほど良き甘さ固さかな　チアキ
聖五月バージンオイルのうすみどり　佐江

あゆみの会（浦和）

新樹なか心の軽く郷歩き　山遊
薫風や単純泉にどつぷりと　倶子
青葉風数十台の単車音　重子
少年のペダルの軽き新樹光　和
ふる里へ続く単線若葉風　圭子
短夜や旅寝の供は単行本　藻好

櫻蔭句会（浦和）

軽やかにフレアスカート初夏の風　美子
レシピ見て中華粽の蒸しあがる　美智枝
初夏の風根づきし苗の背比べ　公子
太極拳大会初夏の公園に　多美子
初夏の田の水面で遊ぶ光かな　道子
少女らの肩先まろき夏はじめ　由紀子
笹剥けば白き粽の踊り出る　真理
夏初め堀割響く利休下駄　茂子
甘酸つぱさは初夏の味なりジャム作り　幸代

野菊の会（与野）

象に会ふそれより夏野匂ふ匂ふ　美代子
燕の巣棚一つ増えたり長屋門　和子
薫風やかすかに揺れる象の耳　清子
石庭の波音たたす黒揚羽　知子
象園に浅き眠りや薄暑光　光子

山茶花（浦和）

もてなしは木洩れ日抜くる初夏の風　マスミ
初夏や幌にかくれし赤ん坊　光子
園庭の手作り幟パタパタと　泰子
初夏やコスモス学院申込む　清一
川巾いつぱいあまた連なり鯉のぼり　美江子
百頭の羊の牧場鯉幟　綾子

蝌蚪の会（浦和）

夏めきてシベリア菓子の苦しかな　しるく
なつめくや洗濯物に陽の匂ひ　朝香
農家カフェ主の趣味の赤き薔薇　るみ子
庭隅の小輪なれど古希の薔薇　風舎
薔薇咲くやアマチュア無線発信す　さち子
ウィンドーの青き設ひ夏きざす　ひさの
草野球団扇がはりの成績表　礼子
積石は江戸の名残りの夏夕月　元美
初恋も夫も年下薔薇散る　月を
功績は全て我がもの毒まむし　鶴城
夏きざす車夫の走りの清々し　宣子

水明熊谷句会（熊谷）

野を渡る風のさみどり新茶汲む　栄子
故郷を遠見の麒麟南風　徹平
母の日に息子装ふ作り声　正行
「來」てふ茶房の新茶ああ甘露　秀子
荒南風やこすり鳴きする船溜り　燈女
正南風の風を把へて一輪車　茂子

繭の会（浦和）

桜餅通信表に五がひとつ　正信
夏立つや五分刈りにする惚頭　風舎
余花みれば去りゆく季のしみじみと　粉雪
門閉ざす園庭寂し子供の日　さよ子
もち食へばあとはそれぞれ子供の日　夕峰
ふる里の余花の山路を越えにけり　トエ
余花ひらりトロッコ列車山に入る　まりこ
やうやくに数への五歳背くらべ　月を
子供の日渓流に乗る浮き二つ　鶴城
仏壇に伯母の五家宝夏来る　京子

櫟の会（浦和）

清水汲むペットボトルの乱反射　文子
奥入瀬の緑の中に清水かな　富美子
文字摺草捩れねぢれて自己主張　千重子
世の中の何に拗ねてる捩花　敦子
山路来て甘露甘露の清水かな　妙子
芝を這ふ嬰の鼻先捩り花　朋子
風格の庵主自作の苔清水　裕誌
サッカーの声援遠く捩花　彰二
捩花やこけしの里の慈母観音　克之
山路きてごくり雑味のない清水　富子
きりきりと痛む心や文字摺草　治子

りそな俳句会（浦和）

新緑に主義も主張も染まりけり　暦文
貴婦人の如き灯台卯月波　寛治
高欄に巫女の衣擦れ夏初月　道を
浅草の鳩は胸張る卯月かな　建治郎
新緑の雨音夜を奏でたり　雅夫
新緑や回向柱に舞ふ散華　マスミ

芙蓉句会（浦和）

大いなる麦穂出揃ふ畑の波　正子
新緑を見上ぐる空に夫遠し　道子
宙に浮く巨大カンバス芝桜　税子
濡るるほど輝く緑男伊達　仁
新緑や雨宿りするフラミンゴ　ともこ
大輪や天地に響く花火かな　文子
新緑やロープウェイはてつぺんへ　美子

鶴川山百合句会（町田）

放たれて自由は淋しゴム風船　雄二郎
靴下を裏にして干すなたね梅雨　月を
紙風船肺活量程弾みたる　喜久
草に落ち草に眠りて風船は　史代
もぢもぢと風船貰ひ損なふ子　広子
風船のあつという間に犬となる　由美子
自由とは手より離るるゴム風船　千春
バゲットの今朝は萎れし菜種梅雨　萬蝶
菜種梅雨母を訪ふ日はいつも降る　理恵
三日三晩気になる虫歯菜種梅雨　美千子
シェルターに空なし風船大空へ　玲子

芽吹句会（浦和）

主なき寂庵無音若葉雨　富子
原宿の青きジーパン風薫る　正子
再起する時か若葉の雨上り　ひろこ
黒潮の匂ほのかに初鰹　修
若葉風入れ欧風のレストラン　千重子
若葉風樹海の息吹胸深く　玲子
鳥声のか細くなりぬ若葉雨　チアキ
青海波の白に際立つ夏料理　道を

若鮎句会（浦和）

水紋の和菓子並びぬ夏浅し　芳春
葉桜やミント浮かべるギムレット　亮一
夏浅し虹の生まるる洗車かな　稀香
赤子笑み白き歯ふたつ夏浅し　悦子
木のかほる森林電車夏浅し　幸代
夏浅し旅行ガイドに赤き丸　さなえ
葉桜やベンチで出会ふ二人の目　万美
夏浅し夜も浅しと吹く風よ　香音子
葉桜となりて日常戻りけり　拓真
夏浅し空に水辺に満ちる恋　月を
淹れたてのお茶の萌黄や夏浅し　鶴城
葉桜や老いて教はるつなぎ糸　喜夫

きざきサークル（浦和）

カクテルに恋の予感のさくらんぼ　昇
少年の背強く見ゆ夏野中　光子
ひさびさの女子会あとの夏野風　かつ子
卒寿なる母と頬張るさくらんぼ　和枝
夏野踏み北アルプスの写生会　喜代子
卓袱台を囲む同胞さくらんぼ　啓子
夏野原嘶いてゐる岬馬　倶子
マイセンの皿のお出ましさくらんぼ　和子

青葉の会（浦和）

ひと雨や黄菖蒲隅の小径ぬけ　森山洋子
夏料理料亭の味と誉められて　美紗子
教室は白に若さの更衣　政代
更衣肩まで軽きバスの旅　真理
美味なるや婿の釣果の鱚さしみ　美智枝
味自慢川辺の店の鮎料理　美子
少女らの腕眩しき更衣　啓子
更衣さみどり色の風流れ　公子
魁夷の絵「道」を掲げて更衣　和子
白シャツにがぶり味みの焼肉が　小川洋子
ときめかぬ物みんな捨てまひよ更衣　輝翠

光が丘俳句教室（東京）

香の円き味噌も手作り柏餅　守伊
柏餅味噌あん残し子供会　はる
五月晴れ自転車とばす柔道着　康子
喧嘩だけ兄には負けぬ柏餅　典子
亡き父も勘定に入れ柏餅　理恵

皐月の会（浦和）

初出勤麻のスーツにハイヒール　光代
癖つ毛を自然のままの梅雨入かな　美佐尾
毅然たる民の反撃五月闇　珪子
船頭のテナー高らか夏柳　順子
久方の雨や枇杷の実太らせる　紀子
法然の絵巻鮮やか半夏生　静香
久々の春野に立てば鶸色に　孝麿
葉柳を眺めゆるりと潮来舟　暦文
葉柳の誘ふ蔵街美術館　きいち

野ばらの会（浦和）

背割れて急発進の天道虫　秀子
見所は曲とのコラボ噴水ショー　栄子
雨上がり地蔵の耳に天道虫　茂子
噴水の陰に白杖友を待つ　夏江
草本を螺旋に進み天道虫　みき子

ミモザの会（横浜）

のびのびと泳ぎ切れるか鯉のぼり　栄子
母の日や白髪梳きし黄楊の櫛　亜弥子
つつじ愛であんパン愛でる母の午後　慶子
母の日のバームクーヘンやや太し　萬蝶
母の日や代りに届く孫メール　由美子
婿のつと捧ぐ一輪カーネーション　玲子
湯に入るをとこつ振りも端午の日　史代
幾年や母の日に挿す白き花　千春

りんどう俳句会（浦和）

売買の問答楽し夜店かな　弘夫
筍や魚板を鳴らす修行僧　翔太
地中には地中の温み筍掘る　君夫
竹の子や生れ素姓は藪の中　正信
筍届く郷里の土を付けしまま　寛治
やる気湧く朝の勤行若葉風　治子
持て余す夜店のひよこ鶏になる　紀子
躊躇ひの刃入る筍もらひけり　卓郎
夜店の灯射的の前の人集り　利子
筍のゆで汁こぼす釜の鍔　徹雄
万緑や清気賜る空也仏　サヨ子
筍を剥けば輝く黄金仏　順子

たかんな俳句会（川口）

ぼうたんの美しき古刹の奥の院　久美子
風死すや今一色の夜の海　のり子
一夜漬三日続きの夏大根　小麦
清清し初夏の狭庭の石畳　勢津子
緋を尽くしぼうたん映ゆる古都の寺　義子
僧園の喝の一声牡丹かな　鶴城
初夏の光源となり進水船　水尾
夜勤明け看護師仰ぐ青葉山　静香

水明松本句会（松本）

木蓮の空を仰いで欠伸する　陽子
鯉のぼり泳いでいるのは家の中　マリス
すくひ風桜の花びら舞ひ上げる　玲子
夜ざくらの天に古雅なる天守閣　寿子

円卓の会（浦和）

透明の傘をさしたる白牡丹　輝翠
涼風や園児ら寝入る昼下がり　修
夕凪や遅れ遅れの電車来る　静香
千年杉に神の息吹や梅雨晴間　道を
尺蠖のどこまで登る枝の先　翔太
モヒートの香り深まる夕薄暑　亮一
夕凪や高まる動悸感じゐて　月を
利休梅懐紙にたづさへ一つ紋　鶴城

花衣の会（浦和）

旅誘ふ駅のポスター夏めきぬ　みよ
紅薔薇や港見晴らすグラバー邸　みち
残照に蔓ばらの白宙にあり　峯雄
バラ一枝部屋を和める力あり　治
品格を持ちて産まれしばらの花　章嘉

珊瑚の会（浦和）

源平の戦の海へ卯波寄す　水尾
アカシアの落花を纏ふ絵画売り　昇
急坂は海に落ち込み卯月波　恵子
卯波立つわが生涯の激しさよ　史代
満開と云へど物憂げ花アカシア　和子
卯浪さ浪丘に小さな祠あり　広子
校門は閉づアカシアの花の昼　和葉
のしかかる雲の重たき卯波かな　かつ子
卯波立つ夕日の洗ふ人魚像　喜恵
花アカシア黙礼美しき修道女　マスミ
卯月浪襟足美しきエトランゼ　節代

水明澪つくし句会（大阪）

限りある命と知りて見る桜　きりり
惜春の止めを波に竿を投ぐ　智恵子
晴天の機上より見ゆ鯉のぼり　美令
雑草にも名あり花あり五月あり　洋子
鯉のぼり鱗は愛し児の手形　人美
さはさはの青葉の下を並び行く　富士桜
天上の風の旨さよ鯉のぼり　ゆら女

神戸大池句会（神戸）

山頂のオルゴール館風薫る　玲子
つつじ咲く狭庭占むるも半世紀　礼子
右に海左に市街や夏山路　千津子
数本の菖蒲すらりと根来塗　早苗

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

母の日や産み月ちかき孫むすめ　延昭
春愁ふマトリョーシカの同じ顔　美枝子
公園のベンチにひとり春惜しむ　淑子
草笛を吹いて寄り目の子が二人　早都子
草笛の鳴る子鳴らぬ子下校の子　俊晴
母の日や母の齢にまた一歩　倶子
草笛の少年老いて笛鳴らず　健司
春深しカッパエビセン止まらない　正信
薫風を渉りて戻るブーメラン　昇

柿の木塾（浦和）

機嫌よき上州三山麦の秋　昇
人間に気後れ少し毛虫焼く　光弥
毛虫這ふ観察日記続ける子　節代
吹き渡る風となりたし麦の秋　俊晴
ふるさとは見えゐて遠し麦の秋　かつ子
我が心恐ろしきかな毛虫踏む　和葉
ふるさとは大きうねりや麦の秋　水尾
卓袱台に真つ赤な薬缶麦の秋　恵子
うかと踏みて菜食主義の毛虫かな　和子

俳句の手ほどき（岩槻）

愛鳥日鳴くを忘れし鳩時計　延昭
生命線突かれ餌を愛鳥日　倭子
鳥千羽森のふくらむバードデー　佐江
樹木医に吾子が誕生愛鳥日　ます美
全開の孔雀とあゆむ愛鳥日　水尾
三脚を並べて待つやバードデー　義子
姿なき声にたたずみ愛鳥日　徹平
椰子の実を岸へ岸へと青葉潮　翔太
子供等が図鑑片手にバードデー　忠男
餌やりは吾子が当番愛鳥日　美子
河岸変へて本音飛び出す菖蒲酒　卓郎
朝まだき魚河岸に活気夏に入る　桂子
バードデー翻訳したき鳥の声　幸代
空を飛ぶ鳥になりたしバードデー　久美子
昼酒は腹にやさしく愛鳥日　かつ子

めだか句会（浦和）

河原風焼き玉ねぎの甘さかな　敦子
自転車やマスクを外し風薫る　謙一
薫風や車椅子押す夫の黙　八千代
雨蛙命のかたち様々に　忠夫
手をつなぎ帰るゆふがた風薫る　育子
雨蛙の白きふくらみ恋の音　美智
雨蛙雨粒ひとつにごり湯に　智子
薫り来る沼からの風句碑の丘　はるみ
亀知らず亀と知らずに雨蛙　月を
ひび割れの土の哀れを雨蛙　鶴城

☆

☆

夏季競詠

（令和４年）

恒例の季音・水明集全員が対象の夏季競詠です。ふるって御出句ください。したがって七月投句の水明集はお休みです。

兼題

「金魚」　「和金」「出目金」など傍題可

「虹」　「朝虹」「夕虹」など傍題可

「石」（詠込み）※夏の季語で詠む。

句数　両題通じて五句

締切　七月二十五日

投句用紙　今月号巻末に添付
季音の方は季音も投句して下さい。

第十七水明抄

＜合同句集＞

原稿募集

第十六水明抄に次ぐ第十七水明抄を、四年振りに刊行します。水明抄は四年毎に発刊しております。皆様奮って御応募ください。

掲載事項　○作　品……自選二十句。ただし第十六水明抄以後の俳句作品。（平成三十年八月以後のもの）
　　○略　歴……性別、本名、著書、賞、所属句会

記載方法　応募用紙は六月号に添付します。（同型のコピーでも可）。俳句は旧仮名づかいとし、前書は一句分と見なします。

参加資格　○水明同人・誌友　○元水明同人・誌友等

参加費用　三五〇〇円
　　参加者には一冊贈呈します。追加購入希望は一冊につき三五〇〇円。
　　参加者に贈呈、追加購入分共に送料無料。

応募締切　令和四年七月末日（必着厳守）
　　原稿に参加費用を添えてお申込み下さい。

送付先　水明俳句会　第十七水明抄係

発行予定　令和四年十一月

第十七水明抄　編纂委員長　井口俊晴

水明夏行と研修会のご案内

水明恒例の夏行を開催いたします。また初日29日㈮の午前中に研修会を企画しております。添付の指定「参加申込書」を使用し、参加費を添えて７月20日㈬までに発行所総務部までお申し込み下さい。大勢の皆さんのご参加をお待ちしております。

【日　時】 令和４年７月 29 日㈮午前 10 時～正午（午前９時受付）
◇題：「文語表現と口語表現／新旧の仮名遣い」
※ご使用の国語辞典をご持参ください

【夏　行】 第１日目：令和４年７月 29 日㈮午後１時～５時
（午後 12 時半受付）
第２日目：31 日㈰正午～５時（午前 11 時半受付）

【会　場】 JR 浦和駅東口「浦和パルコ」10 階
浦和コミュニティーセンター／第 13 会議室

【参加費】 夏行：各日 1,000 円／研修会 1,000 円

事業部

誰もが安心できる句座のために
特集 #MeToo のその先へ
高松　霞／山本千晶
石原ユキオ／岡田一実
西川火尖／堀田季何

◉巻頭三句
黒田杏子
高嶋公久
大高　翔
木暮陶句郎
中川雅雪
山元志津香

◉人と作品
津高里永子 句集『寸法直し』
別所真紀子
今井肖子
大島雄作
澤　好摩

◉好評連載
南　伸坊 ねこはい
筑紫磐井 俳壇観測
坂口昌弘 忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人 句の手触り、俳人の響き
大西　朋 俳句へのまなざし
神作研一 ―てのひらの江戸―古典籍を旅する
藤村公洋 俳句のつまみ
二ノ宮一雄 一望百里

後鳥羽院 遷幸800年 特別寄稿 石寒太

◉今月の華
石井　稔
永井江美子

◉俳句と短歌の10作戦詠
仲　寒蟬
真中朋久

俳句四季 Haiku Shiki
2022年8月号
7月20日発売
定価1000円（税込）
http://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

風　声

○**俳句四季**五月号―「季語を詠む」欄

茴香の花咲く径を里帰り　**鬼之介**

○**俳壇**五月号―「現代俳句の窓」欄

鬼の日の涙渇くや春三日月　網野月を

立て札はピクトグラムや芝萌ゆる

数日を過ぎて雨水と気づきゐる

白梅や隠れてゐたる小指姫

ぴきぴきや一六八十恋猫来

春の星もう何もない願ひ事

○**現代俳句**五月号―「現代俳句の風」欄

繰り返す波のからくり日永かな　青木鶴城

花舞うて鷹鳩と化す瀞の空　大塚茂子

足下に小さな宇宙下萌ゆる　越田栄子

階段をびゆんびゆんびゆんと猫の恋　宮崎紫水

○**天塚**（宮谷昌代主宰）五月号――「珠玉一句」欄

遁走の野火をとどむる青不動　**鬼之介**

○**くぢら**（中尾公彦主宰）五月号―「受贈俳誌美術館」欄

出世頭をかこむ宴よ初桜　**鬼之介**

○**幻**（西谷剛周主宰）五月号――「受贈誌拝見」欄

全開の孔雀に会ふも春寒し　**鬼之介**

○**新月**（松田碧霞主宰）五月号―「受贈俳誌紹介」欄

遁走の野火をとどむる青不動　**鬼之介**

○**菜の花**（伊藤政美主宰）五月号―「諸家近詠」欄

全開の孔雀に会ふも春寒し　**鬼之介**

○**谺**（山本一歩主宰）五月号―「受贈誌の一句」欄

初冬や鎮守の狛の尾に力　曲淵徹雄

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和四年五月三十一日現在―

大塚茂子	5口	鳥羽和風	20口
加藤イツ子	5口	保坂翔太	5口
山本鬼之介	50口	関根千恵	5口
上戸千津子	10口	下川光子	5口
曲淵徹雄	10口		

―合計115口―

後記

「明けない夜はない」とは、良く知られたシェイクスピアの「マクベス」の中の台詞です。どんなに暗くて長い夜でも必ず明ける、朝が来ない夜はないという事でしょう。そしてこれに似た言葉は沢山作られているようです。

「やまない雨はない」とは、お天気キャスター倉嶋厚の言だそうです。そこで「終らないコロナはない」と言いたいと思います。さしもの新型コロナも少し減少してきたようです。

ありがたい事に、延び延びになっていた九十周年の記念祝賀会が、やっと開催出来る運びとなりました。大会と祝賀会がセットで行なえますので、受賞される皆様はじめご参加の皆様も久し振りに、楽しい時を過ごせると思います。九月号にて、全国大会と祝賀会の様子と皆様にご投句頂いた全国大会兼題句の主宰選を特集します。

主宰の句集『マネキン』に続いて、季音雪欄作家の五明昇氏が句集『旅信』を上梓。平成二六年『花林檎』、平成二九年『道草』に次ぐ三冊目の句集です。

白魚の軍艦巻にある平和
木曾節を薬味に峡の走り蕎麦
飛石は着物の歩幅初しぐれ
（自選十句より）

『旅信』の序で主宰は『……「実に上手い」である。もう少し付け加えるなら、「句意が鮮明で容易に共鳴できる……』と書かれています。何よりの誉め言葉でしょう。私はあとがきに驚き、共感しました。『……賢妻・恭子に感謝しつつ……』との件です。これからは日本でも愚妻・家内ではなく、賢妻・愛妻と照れないで書く男性が増えるのでしょうか。

「夏季競詠」七月二五日、「第十七水明抄」七月末締切です。お忘れなくお願いします。（節代）

今月のはてな？

重畳（ちょうじょう） 5
阜（つかさ） 6
追白（ついはく） 19
鼠尾馬尾鼠尾（そびはびそび） 27
復水（おちみず） 33
游治郎（ゆうやろう） 39
鸚哥（いんこ） 67
赤翡翠（あかしょうびん） 77
夏初月（なつはづき） 78
茴香（ういきょう） 85

水明発行所受付時間

曜日：（月・水・金）
時間：12時半～午後4時半
（火・木・土・日・祭日は休み）
水明の行事と重なった時は休み
（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和四年七月号
通巻一一〇二号
令和四年七月一日発行

発行人 山本鬼之介
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一一一七一八
電話 048-886-六〇〇三

発行所 水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一一〇一二
電話 048-822-四七四一

誌代 半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分 二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分 三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇-〇-一九二三九三

印刷所 中央美版

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

職業

年齢

令和四年度夏季競詠

十月号　七月二十五日締切

「金　魚」傍題可
「　虹　」傍題可
「　石　」詠込み
通じて五句

都市又は府県名	氏　名（俳　号）

きりとりせん

令和四年度水明夏行および研修会

参加申込書〈申込締切　7月20日〉

研　修　会	7月29日㈮ 10時～12時	会費￥1,000円	出席・欠席
夏行第１日目	7月29日㈮ 13時～17時	会費￥1,000円	出席・欠席
夏行第２日目	7月31日㈰ 12時～17時	会費￥1,000円	出席・欠席

※出席もしくは欠席を〇で囲んでください。

合計金額	￥　　円

※上記参加費を添えて申し込みます。

2022年7月　　日

住　所	〒		
氏　名		電　話	（　　）

申込書送付先

〒330-0064　さいたま市浦和区岸町4-10-21　水明俳句会

きりとりせん

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

季音 雪月花

九月号 七月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

題

氏名（俳号）

き り と り せ ん

きりとりせん

山紫集

十月号　七月二十五日締切

七月の兼題　「夏の朝」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

氏名（俳号）

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明集

十月号　七月二十五日締切

都市又は府県名

氏　名（俳　号）

きりとりせん

水明通信

きりとりせん

都市又は府県名	姓並びに俳名

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

送り先　〒三三〇-〇〇六四　さいたま市浦和区岸町四ー十ー二一　水明発行所

新誌友紹介　下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒　－		
氏名		電話番号	－　－

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

季音抄

山本鬼之介

卯月浪襟足美しきエトランゼ　大村節代
寄せ書きの「愛」の文字浮く目借時　小倉倭子
熱き手のあの日の記憶梅は実に　栢尾さく子
楽譜類積み上げてある若葉の窓　菊池ひろこ
草笛や風の集まる天守台　五明　昇
愛鳥日鳴くを忘れし鳩時計　境　延昭
母の日や我が子を忘れし母を訪ふ　鳥羽和風
ナプキンの薔薇母の日の予約席　梅澤佐江
貴婦人の如き灯台卯月波　高島寛治
野の花を壺に投入れ立夏かな　大場順子
母の日や天地無用の荷が届く　森川義子
モンブランのインクのブルー風薫る　藤澤喜久
連山の色太りゆく夏はじめ　青木鶴城
青海波の白に際立つ夏料理　日髙道を
江戸小紋さらす川辺や南吹く　大塚茂子
唐丸の往きし街道麦青し　近藤徹平
夜会服月下美人の咲く館　野田静香
此の家のルーツは土佐よ初鰹　石川理恵

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

指切りの爪の半月春愁　渋谷きいち
返球に御辞儀が返る夏隣　村杉清吉
江戸切子二つ並べし春の宵　梅澤輝翠
鈍行のまた抜かれたる暮の春　元田亮一
囀や女子寮いまだ寝静まり　横山君夫
屋根裏は男の根城春の蠅　染谷正信
春の宵「悲愴」の楽に沈潜す　山岸久美子
窓辺より琴の音ほのか春の昼　反町　修
点になるまで見送るバスや風光る　丸屋詠子
鳥の巣を宿す大樹の五百年　新　暦文
季春の出窓映画半券二三枚　菅原真理
小瓶の中にあの日の君と桜貝　越田栄子
春惜しむ沈む夕陽に時あづけ　清水桂子
綾取りのやさしき指よ春愁　篠崎紀子
紅の傘染めたるや春の雪　池田珪子
指先を出せば子燕五羽の口　新井孝麿
雛納め戦禍を記す新聞紙　本橋稀香
木の間より出づる鞦韆川向う　仲田利子

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ)(パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	青木鶴城 太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ)(パルコ・10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋廸代	森本早苗

水明　令和四年七月一日発行　毎月一日発行
（第九十五巻　第七号）　定価　一〇〇〇円